松葉園遺跡 I

大野城市文化財調査報告書

— 第 59 集 —

2 0 0 3

大 野 城 市 教 育 委 員 会

松葉園遺跡 I

（まつばぞの）

大野城市文化財調査報告書

— 第 59 集 —

2003

大野城市教育委員会

ＳＸ20出土遺物群

序

松葉園遺跡は昭和54年に石棺墓が検出され、遺跡の存在が明らかになりました。当時は部分的な発掘調査しかできませんでしたが、18年後の平成９年、共同住宅の建設にともない全面的な調査を実施することができました。平成の調査の際には昭和54年に見つかった石棺墓も破壊されずに当時とほぼ同じ状態で見つかり、ひとえに地権者の文化財に対する理解と保護のおかげと感謝いたしております。

今回の調査では弥生時代中期から後期の遺構が見つかりました。まだその全容はつかめませんが「倭国大乱」の時代、乙金周辺の集落の動向が分かる貴重な資料となりました。本書の成果が今後教育や研究の面におきまして広く活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり地権者をはじめ関係者の方々にご理解とご協力をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

平成15年７月31日

大野城市教育委員会
教育長　堀内　貞夫

例　言

1．本書は大野城市乙金１丁目781－１における埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は昭和54年と平成９年に実施された。

3．挿図中の方位は磁北をあらわす。

4．遺構の実測は丸尾博恵、石木秀啓がおこなった。

5．遺構の写真撮影は丸尾・石木がおこない、遺物の写真撮影はフォトハウスＯＫＡに委託した。

6．遺物の実測は元吉知子・平島義孝・林潤也がおこない、製図は高群朱美がおこなった。

7．本遺跡の遺物・実測図・写真は大野城市教育委員会にて管理・保管されている。

8．本書の執筆は「Ⅲ－２－(５)石器、Ⅳ．まとめ　石器群について」を林がおこない、他は石木が執筆・編集した。

本文目次

Ⅰ．はじめに

1　調査にいたる経緯……1

2　調査体制……1

Ⅱ．位置と環境……2～4

Ⅲ．調査の結果

1　調査概要……5・7

2　遺構と遺物……5～24

Ⅳ．まとめ

遺構の時期……30

焼土塊について……31

石器群について……31

松葉園遺跡の位置付け……32

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1/25000）……3

第2図　調査区位置図（1/2500）……5

第3図　松葉園遺跡遺構配置図（1/200）……6

第4図　ＳＣ01実測図（1/60）……7

第5図　ＳＣ01出土遺物実測図（1/4）……8

第6図　ＳＤ01実測図（1/60）……9

第7図　ＳＤ01出土遺物実測図（1/4）……10

第8図　1号石棺墓実測図（1/30）……11

第9図　1979年調査石棺墓実測図（1/30）……11

第10図　1号石棺墓出土鉄製品実測図（1/2）……12

第11図　2・3号石棺墓実測図（1/30）……13

第12図　ＳＸ03実測図（1/60）……14

第13図　ＳＸ03出土遺物実測図（1/4）……14

第14図　ＳＸ22実測図（1/60）……14

第15図　ＳＸ20実測図（1/30）……15

第16図　ＳＸ20出土遺物実測図①（1/4）……16

第17図　ＳＸ20出土遺物実測図②（1/4）……17

第18図　ＳＸ20出土遺物実測図③（1/4）……18

第19図　ＳＸ20出土遺物実測図④（1/4）……19

第20図　ＳＸ20出土遺物実測図⑤（1/4）…… 20
第21図　ＳＸ20出土遺物実測図⑥（1/4）…… 21
第22図　その他の出土遺物実測図（土器類）（1/4）…… 22
第23図　その他の出土遺物実測図（鉄滓）（1/3）…… 22
第24図　その他の出土遺物実測図（石器）（1/2）…… 22
第25図　その他の出土遺物実測図（焼土塊）（1/3）…… 23
第26図　松葉園遺跡周辺旧地形図（1/25000）…… 30

表目次

出土遺物観察表（土器類）……24～29
出土遺物観察表（石器）…… 29
出土遺物観察表（鉄滓・焼土塊）…… 29

図版目次

図版１（1）調査前全景（西から）
（2）調査区東半部全景（北西から）
図版２（1）調査区西半部全景①（南東から）
（2）調査区西半部全景②（南東から）
図版３（1）ＳＣ01全景（南東から）
（2）ＳＣ01土層（北西から）
（3）ＳＤ01全景（南西から）
図版４（1）ＳＤ01ａ－ａ′面土層（北東から）
（2）ＳＤ01ｂ－ｂ′面土層（南西から）
（3）ＳＤ01ｃ－ｃ′面土層（南西から）
図版５（1）１号石棺墓掘方検出状況（北から）
（2）１号石棺墓全景（北から）
図版６（1）１号石棺墓南側壁裏込め（西から）
（2）１号石棺墓北側壁裏込め（西から）
（3）１号石棺墓東小口壁裏込め（南から）
図版７（1）１号石棺墓西小口壁裏込め（南から）
（2）２号石棺墓全景（西から）
（3）３号石棺墓全景（東から）
図版８（1）ＳＸ22周溝状遺構土層（南東から）
（2）ＳＸ20土層（南から）
（3）ＳＸ20内井戸状遺構（南東から）
図版９（1）ＳＸ20遺物出土状況①（南東から）
（2）ＳＸ20遺物出土状況②（南から）
図版10（1）ＳＸ20出土遺物
（2）調査区内出土焼土塊
図版11（1）１号石棺墓出土鉄器
（2）調査区内出土石器類
図版12～14　出土遺物①～③

Ⅰ．はじめに

1．調査にいたる経緯

松葉園遺跡は大野城市乙金１丁目781－１に所在する。当地は住宅地の中にあり、畑として利用されていたが、平成８年に地権者である大塚健児氏より集合住宅建設の計画が提出された。当地では昭和54年（1979年）５月に畑の中より偶然石棺墓が発見されたことから、緊急調査を実施したところ石棺内より鉄鏃・刀子が出土した。当時の調査は石棺墓のみを掘り下げて、石棺の実測をおこなったもので、周辺は未調査であった。調査後石棺墓は埋め戻され、再び畑として利用されていたが、今回の開発計画の提出にともない平成８年12月に試掘調査を実施したところ、現地表面下10～35cmで遺構面に達し、ピット等が検出され、弥生土器が出土した。これにともない地権者と協議をおこなった結果、当該地の全面を発掘調査することとなった。調査は平成９年４月14日から６月13日の間実施した。調査面積は277㎡である。なお、地権者である大塚健児氏には費用等の負担等多大なご協力を頂いた。記して感謝申しあげます。

2．調査体制

発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。

平成９年度発掘調査

教育長	堀内貞夫
教育部長	香野信義
社会教育課長	赤星健彦
文化財担当係長	舟山良一
主任技師	向　直也
	徳本洋一
	石木秀啓（調査担当）
技師	丸尾博恵（調査担当）
嘱託	西村晴香

平成14年度整理作業

教育長	堀内貞夫
教育部長	鬼塚春光
社会教育課長	秋吉正一
文化財担当係長	舟山良一
主任技師	徳本洋一
	石木秀啓（整理担当）
	丸尾博恵
	林　潤也
主任主事	大道和貴
嘱託	元吉知子

〔発掘調査参加者〕

那波幸子　西田幸子　前田チエ子　内山マサ子　高木冴子　原田敬子　高木幸子　大海雅子
島崎真知子　福岡麗子　藤田和子　中山三千代　満富スエコ　武下里織

〔整理作業参加者〕

松岡信子　町井裕子　鬼塚穂子　高群朱美　渡辺直美　村山律子　白井典子

Ⅱ．位置と環境

松葉園遺跡は古くからの集落である乙金村の中に含まれ、周辺は宅地化が進み、本来の地形は明らかにし難いが、明治時代に発行された25000分の1の地形図を見ると、遺跡が乙金山から西側に派生する低丘陵がさらに西側に舌状にのびた所に位置することが分かる。調査地は畑として利用され、調査前は遺構が良好な状態で検出されるものと考えていたが、遺構の残存状況から見てかなり削平を受けたものと考えられる。周辺の丘陵では旧石器時代以来濃密な人類の活動の痕跡が残されており、本来それらを概観し、松葉園遺跡の通史的な歴史環境を明らかにすべきであるが、今回の調査内容がほぼ弥生時代に限定できることから、ここでは弥生時代の集落・墓地の変遷について取り上げてみたい。

まず御笠川東岸における集落の様相については、釜蓋原遺跡（註1）・雉子ヶ尾遺跡で夜臼式土器が採集され、昭和28年に原田遺跡で該期の住居が確認されていることから集落の存在が推測されるが、周辺は未調査であり、詳細は不明である（註2）。調査によって集落が確認されるのは中期に入ってからで、森園遺跡で中期中葉から中期末の竪穴住居跡19軒が検出され、中・寺尾遺跡においても丘陵東側斜面では中期前半から後半にかけての竪穴住居跡が確認されており、同一丘陵の先端部に位置するヒケシマ遺跡でも中期の竪穴住居跡が確認されている。またやや場所が南へ離れるが、陣ノ尾遺跡（註3）や国分尼寺遺跡（註4）で中期の集落が形成されており、大城山の西方にのびる丘陵で該期に活発な活動があったことが伺えるが、後期の集落は成屋形遺跡（註5）で確認されているくらいである。

墓地については、塚口遺跡（註6）では前期後半から末の甕棺墓、木棺墓・土坑墓、御陵前ノ椽遺跡（註7）では副葬小壷をともなう前期中ごろから後半の甕棺墓が確認され、中・寺尾遺跡（註8）丘陵先端部において、前期中ごろから後半を主体とする甕棺墓・土坑墓が確認されている。また金隈遺跡（註9）からは前期中ごろから中期末にかけて墓地が営まれており、周辺で前期の集落の存在が伺える。中期の墓地としては、ヒケシマ遺跡や森園遺跡で確認されており、森園遺跡（註10）の中期後葉の小児用甕棺には碧玉製管玉57個が副葬されていた。後期の墓地については確認されておらず、集落の様相と比較しても御笠川東岸においてはこの時期遺跡数が少ない傾向が指摘できる。

御笠川西岸における集落の様相については、未報告であるが川原遺跡では前期の土坑が確認され、周辺に集落の存在が想定される。川原遺跡の北西約1kmにある井相田C遺跡3・4次調査（註11）では、前期中葉から中期初頭にかけての集落、麦野C遺跡第5次調査（註12）では前期末の竪穴住居跡が確認されている。また、石勺遺跡（註13）においても夜臼式土器を含む溝が検出されており、雑餉隈遺跡5次調査（註14）では前期後半の竪穴住居跡5軒が確認されていることから、平野部において前期より集落の活動が活発であったことを示している。中期になるとさらに遺跡数は増大しており、石勺遺跡では中期全般、村下遺跡では中期から後期後半、麦野C遺跡第5次調査においては中期末から後期初頭にかけての集落を確認している。駿河遺跡（註15）では、中期末から後期にかけての竪穴住居跡・掘立柱建物が確認され、青銅製鋤先の出土や大形の住居が検出されており、

大野城市　1松葉園遺跡　2石勺遺跡　3村下遺跡　4川原遺跡　5ヒケシマ遺跡
6中・寺尾遺跡　7森園遺跡　8仲島遺跡　9御陵前ノ椽遺跡　10銀山遺跡　11原田遺跡
12雉子ヶ尾遺跡　13榎町遺跡　14松ノ木遺跡　15釜蓋原遺跡　16塚口遺跡

春日市　17立石遺跡　18原町遺跡　19駿河遺跡　20九州大学筑紫キャンパス内遺跡　21御供田遺跡
22春日高校内遺跡

福岡市　23金隈遺跡　24南八幡遺跡9次　25雑餉隈遺跡群5次　26麦野C遺跡群5次
27井相田C遺跡群3次　28井相田C遺跡群4次

第1図　周辺遺跡分布図（1/25000）

近接する原町遺跡（註16）では水道工事中に銅戈48本が出土しており、注目される遺跡である。仲島遺跡においてはこの時期より集落の形成が認められ、古墳時代後期の遺構より出土しているが貨布・後漢鏡片・銅鏃などは後期にかけて招来されたものと考えられる。後期に入ると、南八幡遺跡第９次調査（註17）で後期の竪穴住居跡と掘立柱建物を確認。ガラス小玉・管玉が全体で95個以上出土しており、辰砂粒も出土している。立石遺跡（註18）では後期前半の大柱遺構が確認され、戦国式銅剣が出土している。須玖岡本遺跡群の東南端に位置するとされる。

墓地については、石勺遺跡で中期前葉の甕棺墓と中期後葉から末の甕棺墓・土坑墓と木棺墓・石棺墓が確認されており、立石遺跡で中期前半の甕棺墓が確認され、細線式獣帯鏡・中細形銅剣・青銅製鋤先が過去に採集されている。

以上より、松葉園遺跡は森園遺跡や中・寺尾遺跡などとともに大城山西側丘陵に位置する中期の集落の中心であったと考えられる。該期には奴国の中心たる須玖岡本遺跡群があるが、これらは御笠川西岸の平野部に位置しており、立地を異にしている。さらに、遺跡が粕屋平野から福岡平野へ抜ける谷の出口に位置していることが指摘でき、注目すべき遺跡である。

註１　舟山良一・向直也『釜蓋原遺跡』大野城市文化財調査報告書第25集（1988）

２　岩瀬正信「Ⅰ．立地と環境」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅦ（1977）

３　山本信夫『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』太宰府町の文化財第４集（1981）

４　『太宰府市史　考古資料編』（1992）

５　宮崎亮一『成屋形古墳』太宰府市の文化財第38集（1998）

６　松浦智『塚口遺跡』大野城市文化財調査報告書第58集（2002）

７　向直也『御陵前ノ椽遺跡』大野城市文化財調査報告書第48集（1997）

８　舟山良一『中・寺尾遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第54集（1999）

９　折尾学『史跡金隈遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集（1985）

10　徳本洋一・向直也『森園遺跡Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第26集（1988）
向直也『森園遺跡Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第55集（1999）

11　吉留秀敏『井相田Ｃ遺跡５』福岡市埋蔵文化財調査報告書第658集（2000）
大庭康時『井相田Ｃ遺跡第６次』福岡市埋蔵文化財調査報告書第519集（1997）

12　本田浩二郎『麦野Ｃ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第643集（2000）

13　石木秀啓『石勺遺跡Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第47集（1996）
舟山良一『石勺遺跡Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第50集（1997）
向直也・丸尾博恵『石勺遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第52集（1998）

14　宮井善郎『雑餉隈遺跡４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第569集（1998）

15　池辺元明『駿河遺跡』福岡県文化財調査報告書第98集（1992）

16　『春日市史』春日市史編さん委員会（1995）

17　小林義彦『南八幡遺跡５』福岡市埋蔵文化財調査報告書第641集（2000）

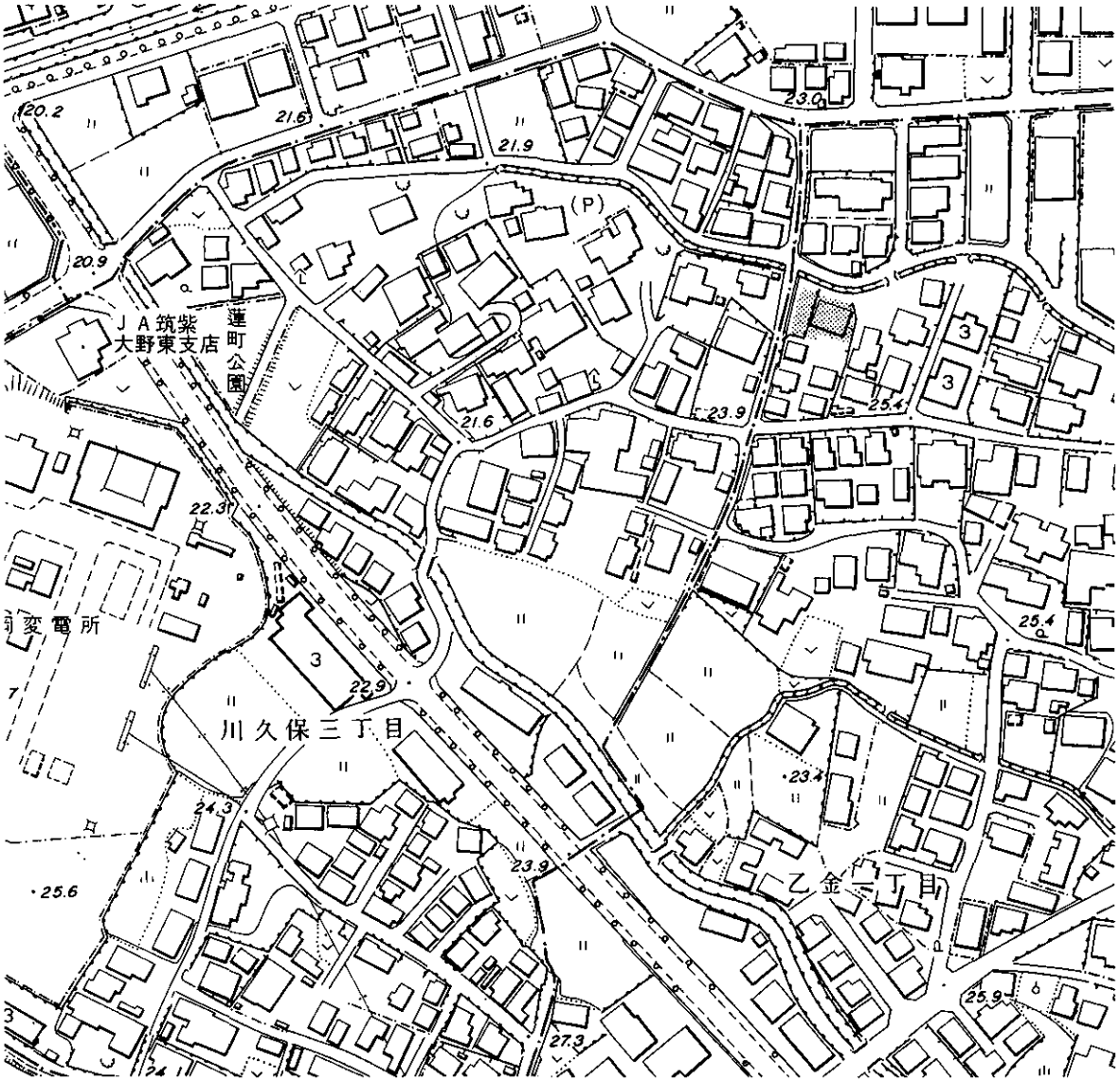
18　境靖紀『立石遺跡』春日市文化財調査報告書第34集（2002）

Ⅲ．調査の結果

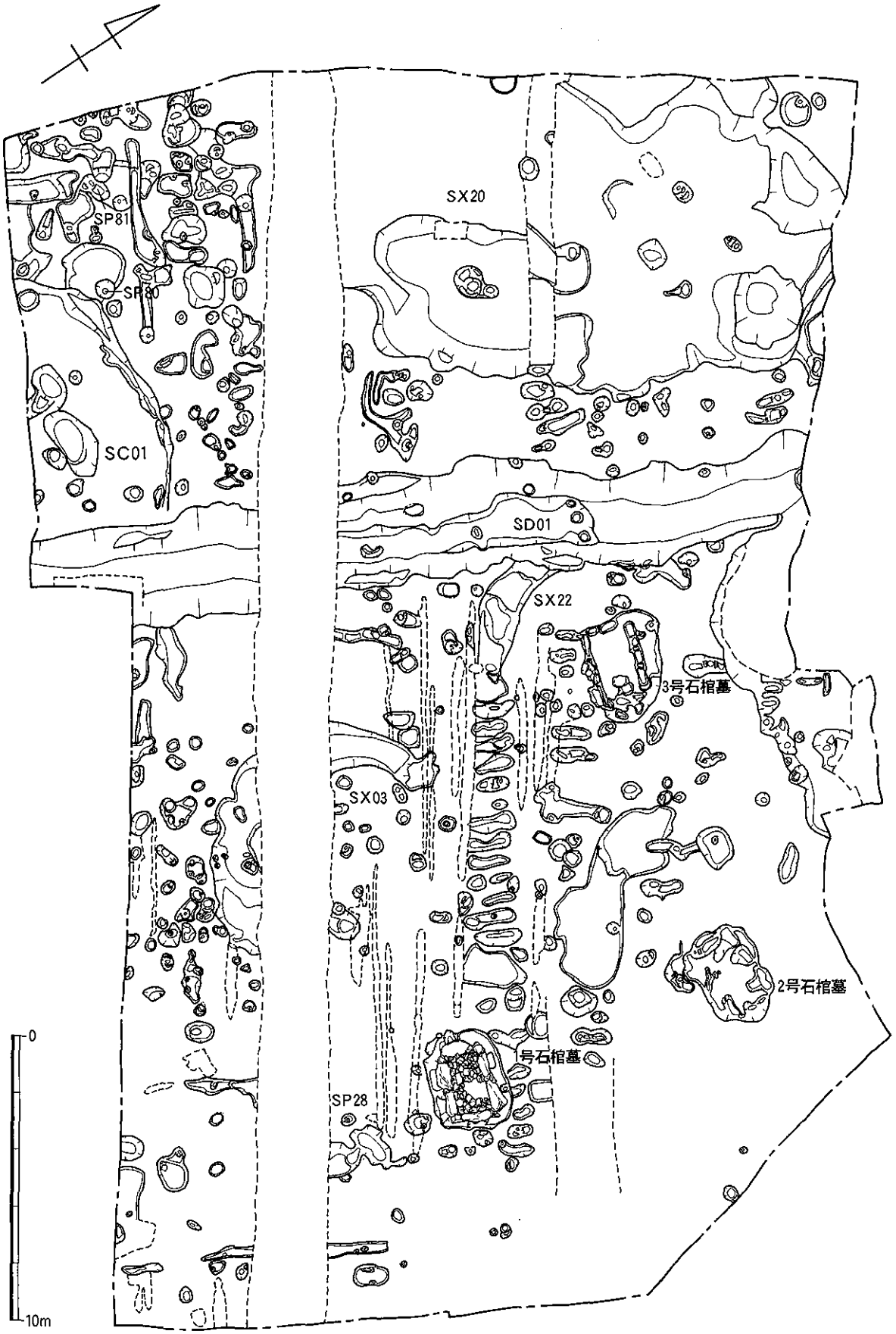
1．調査概要

先述のとおり、松葉園遺跡は昭和54年に石棺墓の調査が実施された。当時より畑として利用され、調査時までその状況は変わっていない。表土剥ぎを行ったところ、地表下10～35cmで遺構確認面に達した。調査区の東側が高くなっており、西側へ向かってゆるやかに傾斜している。遺構は石棺墓の側壁が確認面より10cmほど高くなっていることから、相当の削平を受けたと思われる。

調査は東側半分から実施し、反転して西側半分を実施した。地表下から遺構確認面までは畑の耕作土で、包含層の形成は認められなかった。検出された遺構は石棺墓３基、竪穴住居１軒、溝１条、土坑４基、その他多数のピットである。竪穴住居、溝は弥生時代中期末ごろにあたる。石棺墓は昭和54年の調査で刀子・鉄鏃が石棺内より出土しており、今回の調査で前回調査出土鉄鏃の断片であろうと思われる鉄鏃片が出土している。しかし、棺内から土器の出土はない。その他遺構としては確認できないが、弥生時代後期の土器や瓦器、同安窯系青磁碗、近世陶器片が小片少量ながら出土



第２図　調査区位置図（1/2,500）



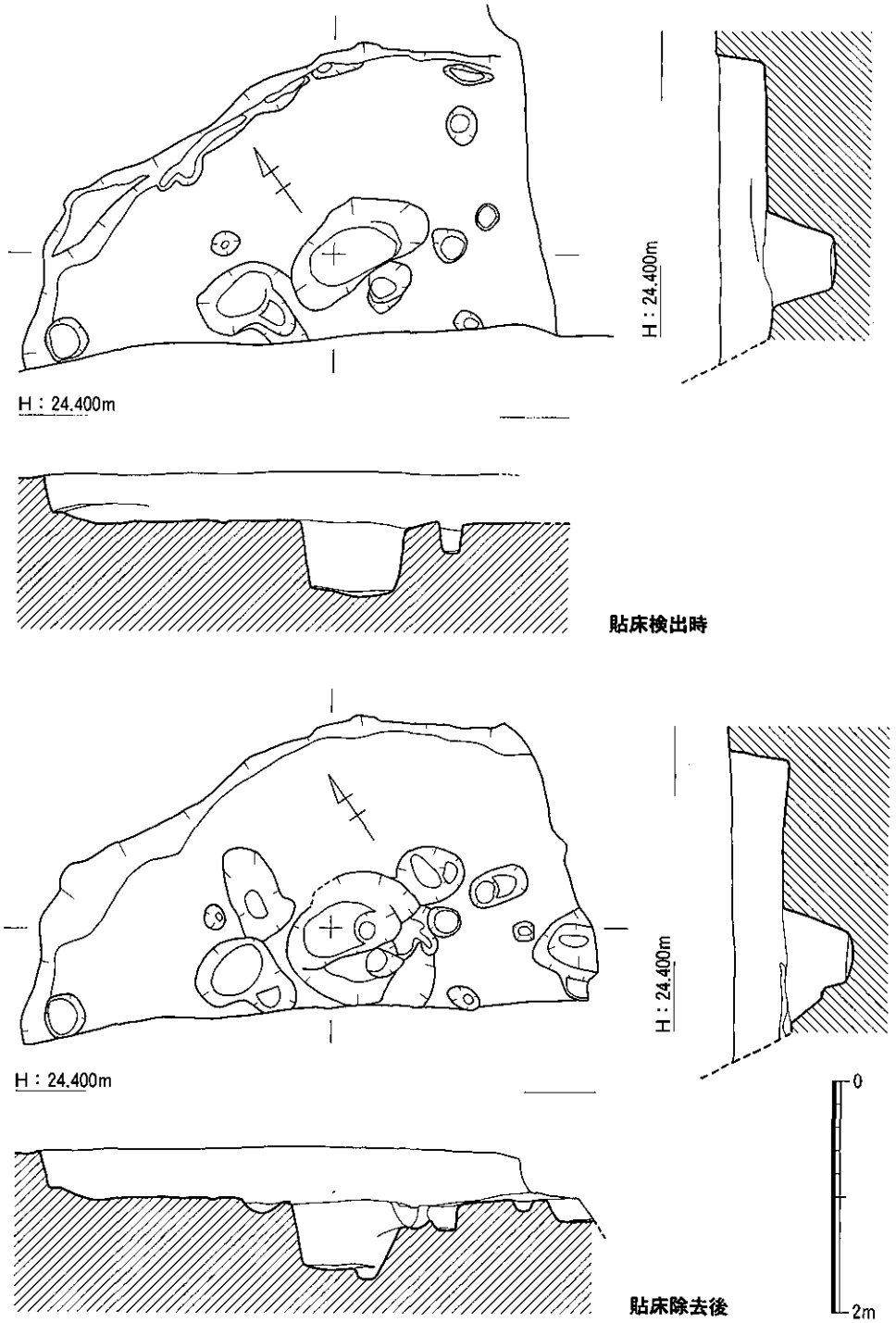
第３図　松葉園遺跡遺構配置図（1/200）

しており、周辺での活動が考えられる。また、弥生時代の遺構から旧石器時代から縄文時代にかけての黒曜石やサヌカイト製の石器が出土しており、釜蓋原遺跡や雉子ヶ尾遺跡などの大城山山麓に展開する該期の遺跡が周辺にも広がると推定される。

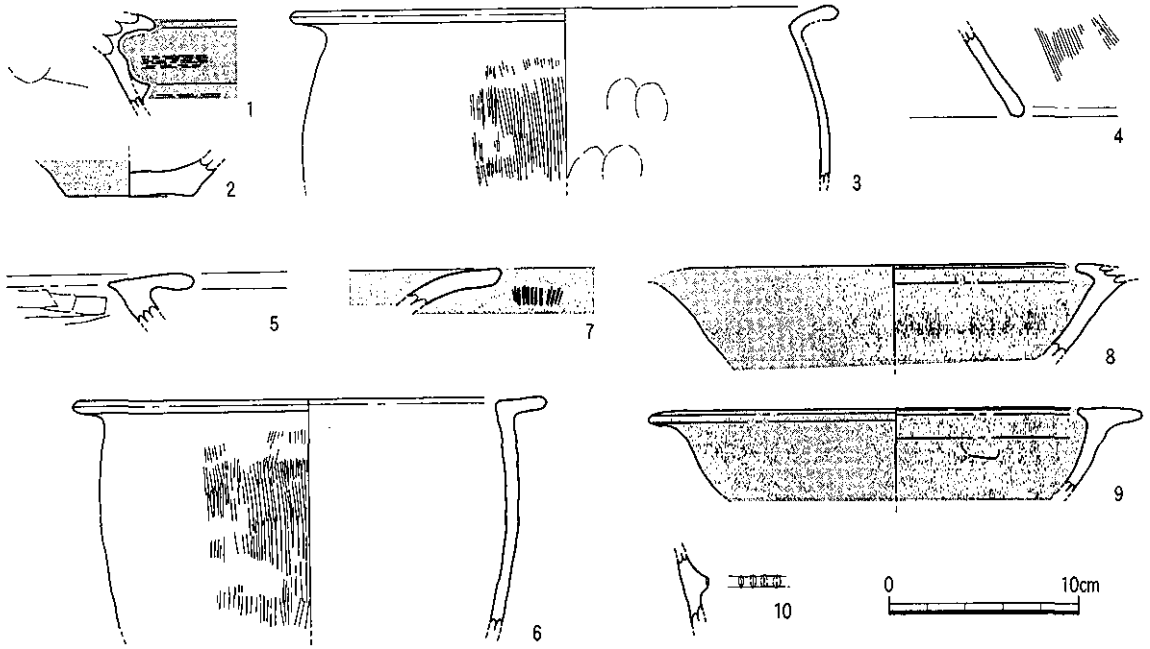
2．遺構と遺物

（1） 竪穴住居跡

ＳＣ01（第４図、図版３）



第４図　ＳＣ01実測図（1/60）



第５図　ＳＣ01出土遺物実測図（1/4）

調査区の南西側に位置する円形プランの住居であるが、南半分は調査区外へのび、東側はSD01に切られ、全体の1/4程度しか残っていなかった。このため住居の正確な規模は明らかでないが、復元すると直径６ｍあまりと思われる。確認面からの深さは42cm、壁溝は北側の一部に認められるが、深さは３cm程度と非常に浅い。床面はほぼ平坦で、東側半分は最大８cm貼床が残っていた。埋土は褐色土7.5YR4/4の１層のみであった。住居の中央部には炉跡と思われる1.3×0.64m、深さ63cmの楕円形プランの土坑が確認された。埋土はにぶい橙色粘質土7.5YR6/6をふくむ褐灰色砂質土7.5YR5/1である。柱穴は１つ確認されたが、その他は確認できなかった。

出土遺物（第５図）

埋土中からはパンケース1/3ほど遺物が出土した。いずれも弥生土器であるが、小片のため図化できたものが少なかった。１～４は上層出土、５～10は下層出土である。

１・２・７～９は祭祀土器、他は日常土器である。１は甕で、口縁部内側を欠き、端部はやや下がる。外面のみ丹塗りが施される。２は壷の底部と思われる。平底で、外面に丹塗りが認められる。３は甕。内傾する逆Ｌ字状の口縁を呈し、端部・内側とも丸く仕上げられる。４は高杯などの脚部か？傾きに難がある。外面にハケメを施す。５は内傾する口縁を持つ甕。内側は鋭い。６は逆Ｌ字状口縁の甕で、やや内傾する。７は広口壷。内外面に丹塗りを施し、外面に暗文風のミガキが認められる。８・９は高杯。いずれも内外面に丹塗りが施され、９は端部がやや下がる。10は住居内のピット出土。器種不明であるが、突帯に刻み目が施される。

（２）溝

ＳＤ01（第６図、図版３）

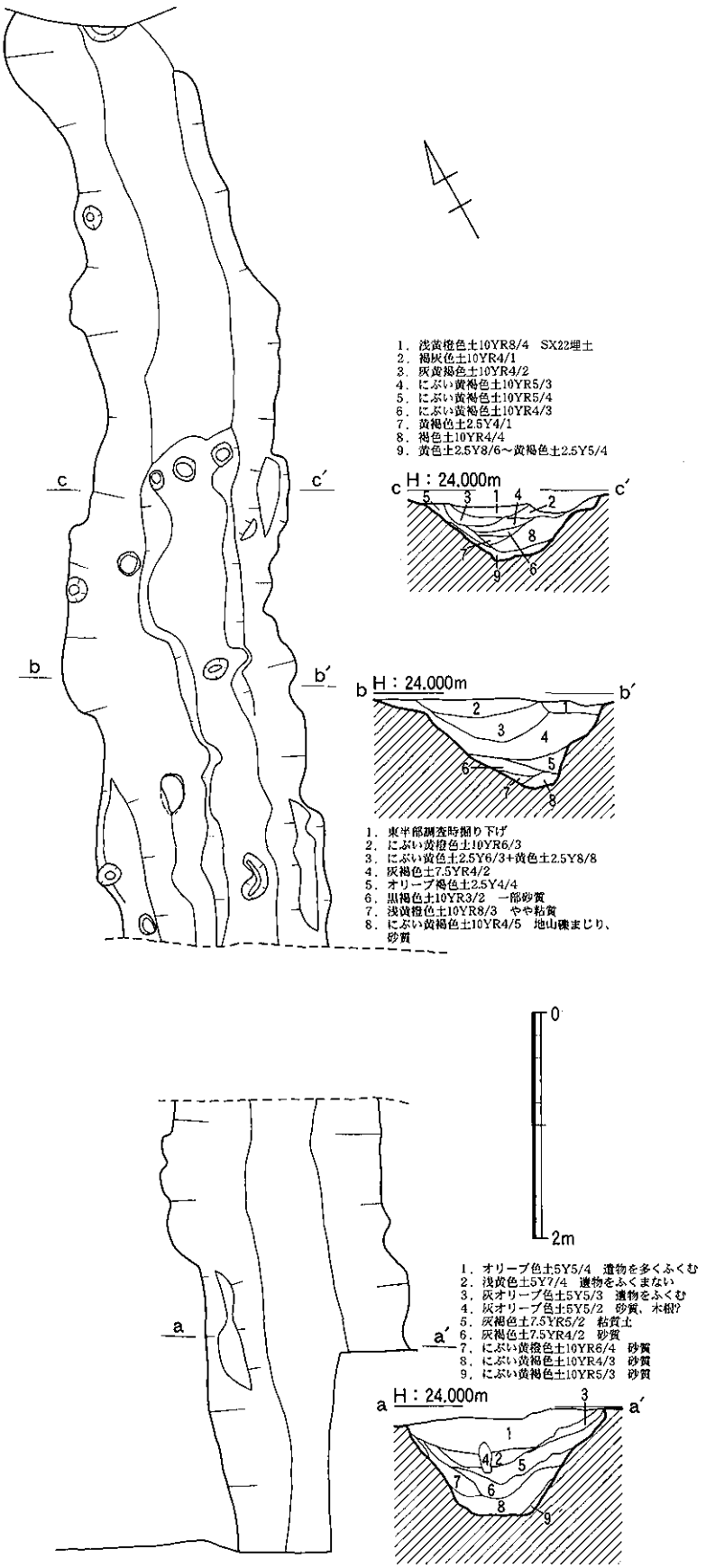
調査区の中央部よりやや西側を略南北方向に横切り、SC01を切り、SX22と畑の耕作にともなうトレンチに切られる。断面は逆台形を呈し、幅1.2～1.93ｍ、溝底の幅60cm前後である。溝の深さは確認面より約60～90cmで、確認面のレベルを測ると北側へ向かってゆるやかに下がっている。

調査区の北側には小さな川が東西方向に流れており、旧地形もこれにむかって下がっていたものと考えられるが、溝底のレベルを測ると、逆に南側へ向かって緩やかに傾斜しており、南北の高低差は約20cmである。埋土は自然堆積で、セクションａ－ａ′面６層、ｂ－ｂ′面４層、ｃ－ｃ′面７層以下は砂を含み、遺物取り上げの際これを下層とした。

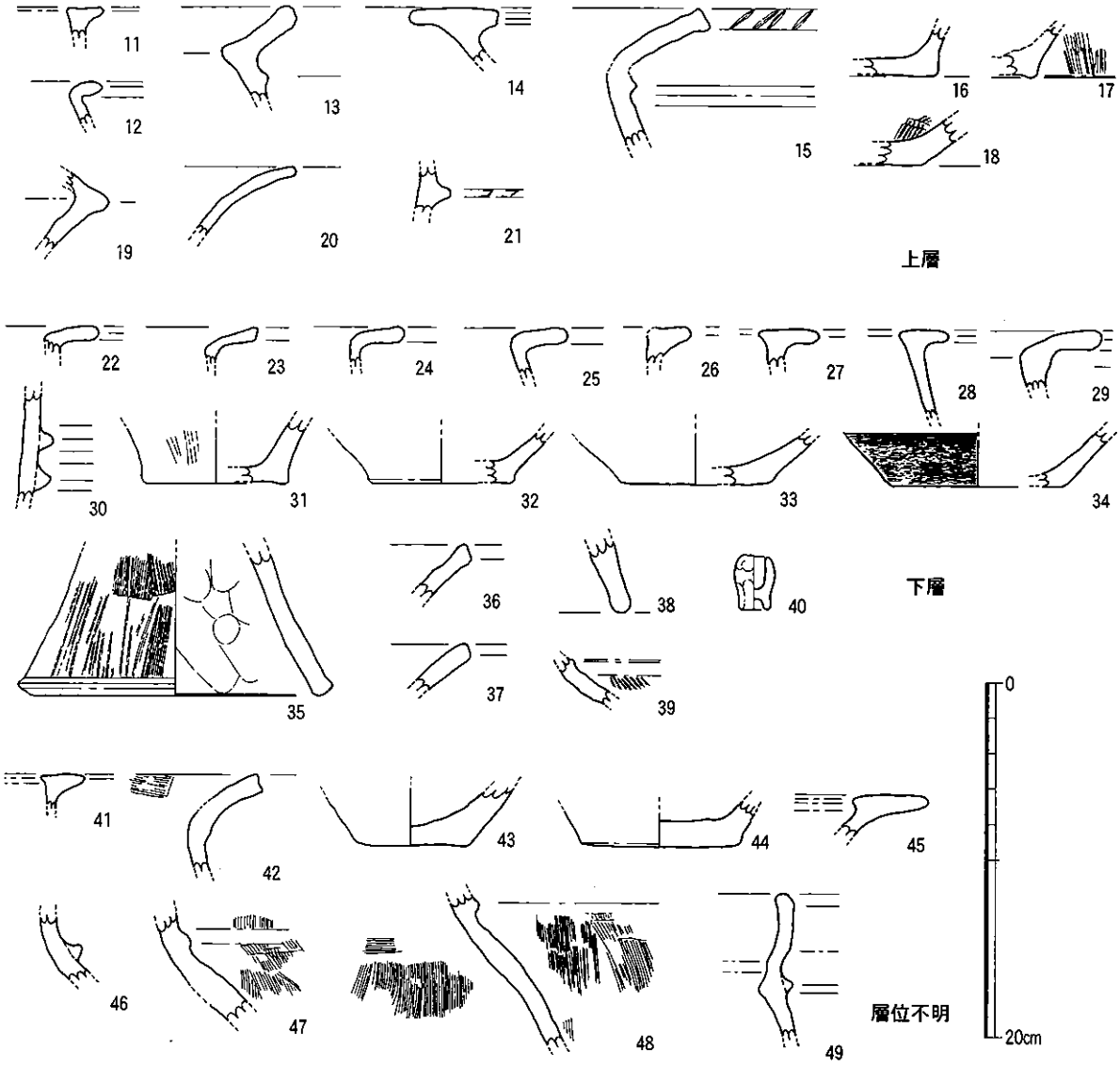
出土遺物（第７図、図版３・４）

埋土中からはパンケース４箱ほど遺物が出土した。瓦や磁器・須恵器の破片が上層より少量出土したが、下層からの出土遺物は弥生土器で占められることから撹乱等による混入と考えられる。11～21は上層、22～39は下層、40～49は層位不明である。

11～18は甕。11は口縁部平坦面が水平になる。12は壷の可能性もある。14は甕棺か？口縁平坦面は水平で、内側へ突出し、丸みのある胴部をとるようである。15は甕棺。口縁部は大きく外反し、端部にキザミ目を施す。頸部には低い三角突帯を巡らせる。16～18はいずれも平底。19は口縁端部を欠失するが袋状口縁壷と思われる。20は広口壷。21は壷の突帯にキザミ目を施す。22～29は甕の口縁部。22・24・25は逆Ｌ字状の口縁で、やや内傾する。23は口縁端部を面取りする。26は口縁が平坦になり、内側端部は剥落する。高杯の可能性もある。27は口縁部平坦面に弾けたようなクレーター状の剥離痕がある。27・28は口縁部内側をわずかに突出



第６図　ＳＤ01実測図（1/60）



第７図　ＳＤ01出土遺物実測図（1/4）

させる。29は頸部に強いヨコナデを巡らせ、三角突帯状の筋を作り出している。30はコの字に近い突帯を２条巡らせるもので、甕棺の胴部にあたる可能性がある。31・32は甕、33・34は壷の底部で、いずれも平底。34は外面を丹塗りする。35は器台脚部片。36・37は甕の口縁部か？いずれも端部を面取りし、36は内側が弾けた痕跡がある。38は器台。39は壷の胴部で、細く低い突帯を巡らせる。40は手づくね土器。臼状で下面もくぼんでいる。41・42は甕口縁部。41は内側をわずかに突出させる。42はナデにより頸部に低い突帯を作り出している。

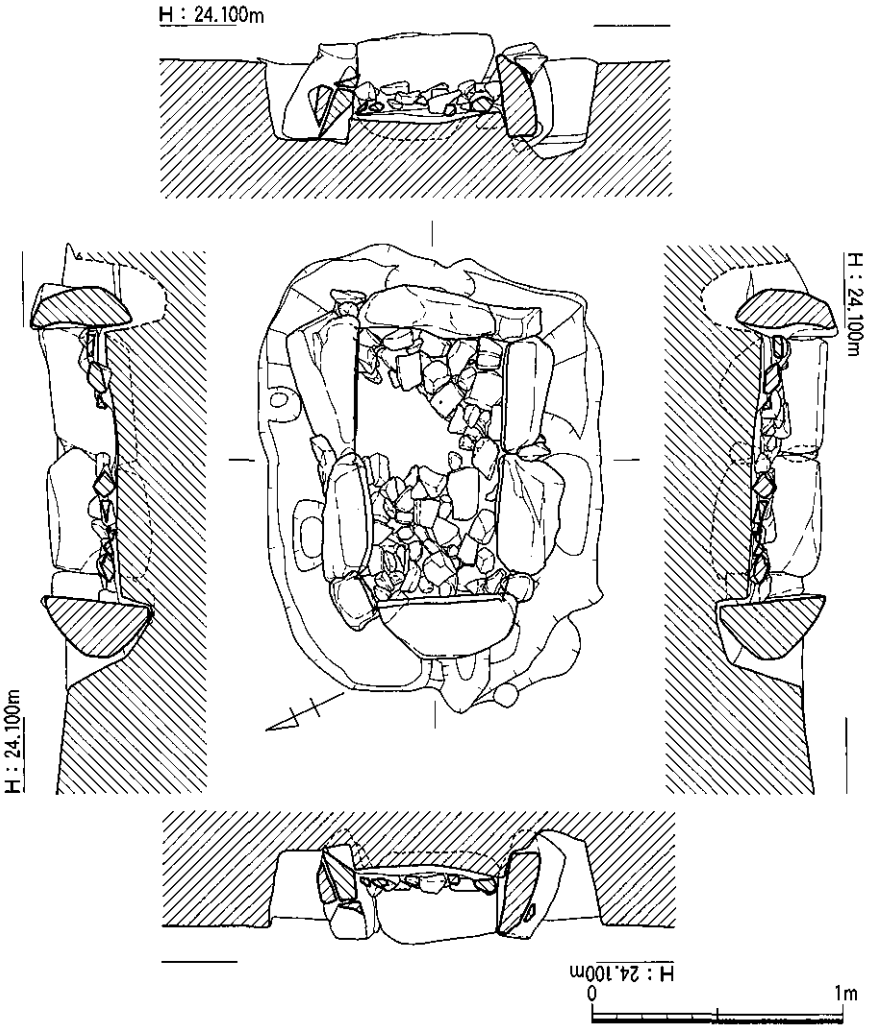
口縁部は大きく外反する。43は壷、44は甕の底部で、いずれも平坦になる。45は高杯。全体に摩滅している。46～48は壷の胴部片。47・48は内外面にハケメを施し低い突帯が巡る。49は器種不明。図は傾きに難がある。口縁部はやや外方へ開いた後まっすぐ上方に立ち上がり、頸部に三角突帯を巡らせる。

（３）　石棺墓

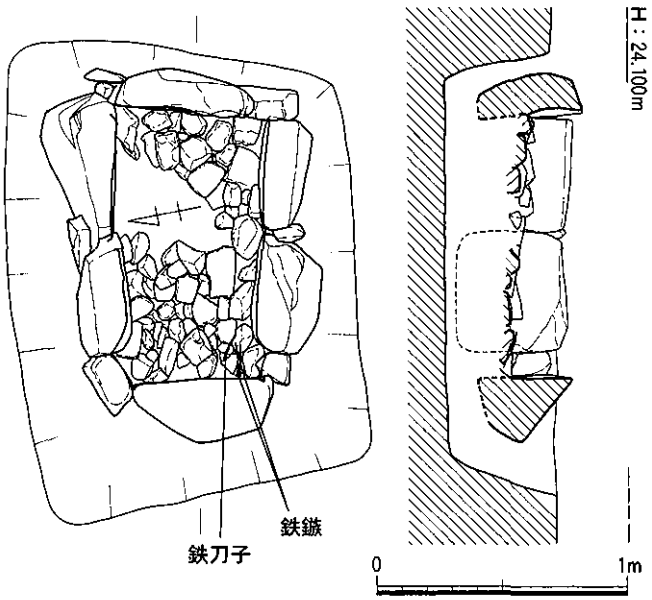
１号石棺墓（第８・９図、図版５～７）

調査区の東側に位置し、今回検出された石棺墓の中では最も残りのよいもので、昭和54年に発見・調査された石棺墓である。盛土等は確認されず、墓坑は長1.70×幅1.33mの隅丸長方形を呈する。石棺はN－66°－Wに主軸をとり、主軸長1.05m、幅0.51～0.61mと東小口壁側が若干広くなっている。側壁は南北とも2枚の大石を東小口壁に接するように並べ、西小口壁との間に生じた隙間を縦長の石材をもって補っており、このため平面プランはややいびつな形となっている。また側壁上端が墓坑掘り込み面のレベルより約10cmほど高くなっており、耕作にともなう削平の程度が推測できる。

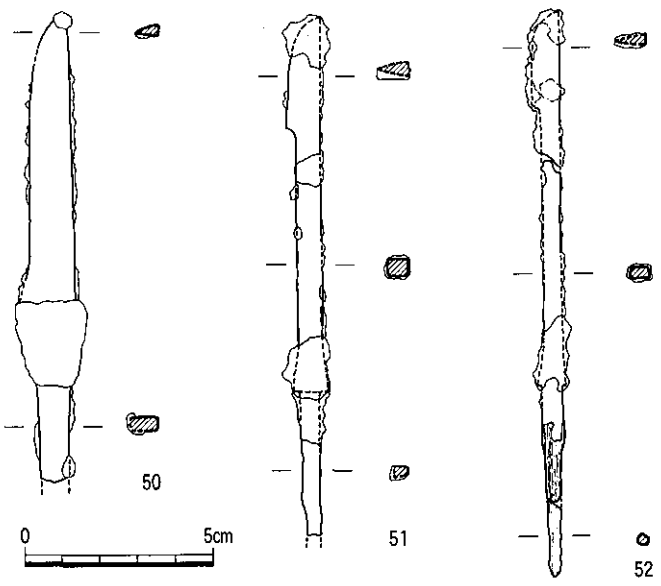
床面には敷石が認められるが一部は既に失われており、これは昭和54年調査の実測図でも確認できる。敷石から側壁の上端までの高さは約20cmと浅いが、控積みは認められないことから2段目の石積みはなく、側壁上に石ないしは板材を蓋として覆ったと考えられる。石室内からは昭和54年調査において刀子1本・鉄鏃2本が南西隅の敷石上から出土しており、今回の調査では鉄鏃の残片が1点出土している。



第8図　1号石棺墓実測図（1/30）



第9図　1979年調査石棺墓実測図（1/30）



第10図　1号石棺墓出土鉄製品実測図（1/2）

出土遺物（第10図、図版11）

50は鉄刀子。茎尻を欠く。茎には細い筋状の痕跡が認められ、何かが巻かれていたようである。51•52は鉄鏃。いずれも片刃箭式の長頸鏃で、箆被部には木質が残る。今回の調査で出土したのは52の鏃身部で、敷石の下から出土した。

2号石棺墓（第11図、図版7）

調査区の北東隅に位置し、略東西方向に主軸をとる。石材は敷石がわずかに確認された他はすべて抜き取られていた。墓坑は長1.77×幅1.14m、床面までの深さは約10cmしか残っていない。墓坑の北側には側壁の掘り方が3個並んで確認でき、東西小口壁も確認できるが、南側壁は1個しか確認できなかった。石材掘り方より判断すると、主軸長1.15m、幅0.54mと1号石棺墓に近い規模であったと推測できる。

出土遺物は弥生土器・黒曜石チップが出土したが、いずれも小片のため図化できなかった。

3号石棺墓（第11図、図版7）

調査区の中央に位置し、墓坑掘り方からみると、1号石棺とほぼ同じような主軸方向をとる。石材は南側壁の一部と敷石がわずかに残っていたほかはすべて抜き取られていた。墓坑は長1.81×幅1.38m、床面までの深さは約5cmしか残っていない。墓坑内には周壁の掘り方が確認でき、復元すると主軸長約1.2m、幅0.68mと1号石棺墓に近い規模であったと推測できる。

出土遺物は弥生土器・黒曜石チップ・陶器片が出土したが、いずれも小片のため図化できなかった。

（4）周溝状遺構

調査区内で検出された遺構の内、平面プランで幅の狭い溝が弧状に巡るものを周溝状遺構とした。これは先述の石棺墓に伴うものではないかと調査時に考えたが、結局確認することができなかったため、今回石棺墓の周溝となる可能性があるという形で報告をおこなうものである。

SX03（第12図、図版1）

調査区のほぼ中央部に位置し、畑の耕作にともなうトレンチに切られているため、詳細は不明であるが、溝の東半分は検出されず、C字に近い平面プランを呈しており、溝の内側上端間は約3m程度に復元できる。溝の幅は54～90cm、深さは浅い所で2cm、深い所で約20cm、溝の床面は凹凸が激しい。溝の内側にはピットのみであった。

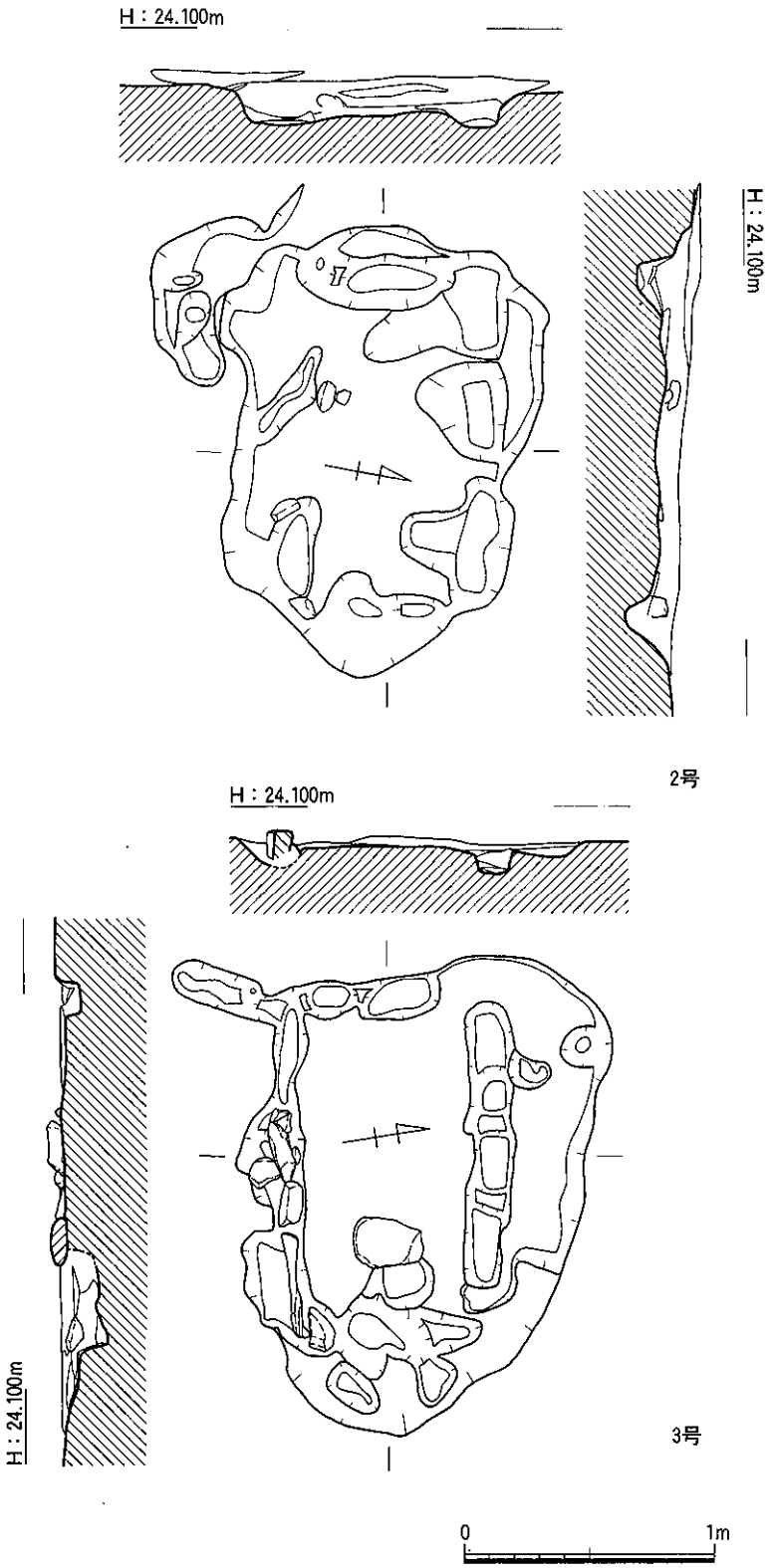
出土遺物（第13図）

出土遺物には弥生土器がほとんどであるが、瓦片など近代の遺物が若干混じっている。しかしこれらは畑の耕作にともなうトレンチとのベルト中から出土しており、耕作時に混入したものと考えられる。また弥生土器のほとんどは細片であり、図化したもの以上に残りがよいものはない。

53～56はいずれも弥生土器で、56以外は甕である。53は口縁部が大きく外反し、頸部には低い突帯を巡らす。口縁部内面には弾けたような痕がある。54も口縁部が大きく外反し、頸部から口縁部外面にかけてタテハケが施される。55は底部。内面は弾けたようであり、凹凸が著しい。56は器台。内外面とも器壁の荒れが激しい。

ＳＸ22（第14図、図版１）

３号石棺墓のすぐ西側に位置する。SD01を掘り下げる際、溝の掘り方がSD01を切ることを確認したが、図化できたのは溝の外側の一部だけであった。溝は３号石棺墓を取り巻くように弧状に残っているが、東半分は検出されなかった。このため溝が３号石棺墓に伴うかどうか調査時には確認できなかったが、可能性は高いと考えている。溝の幅は60～74cm、深さ10～20cmで床面は凹凸があり、断面は浅い皿状を呈する。溝の内側上端から３号石棺墓の中心までは1.7～2.0ｍで、完周すれば４ｍ前後に復元される。



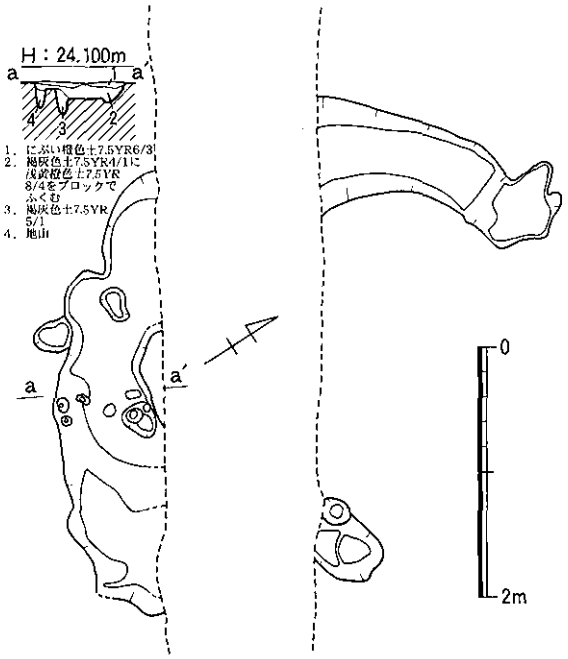
第11図　２・３号石棺墓実測図（1/30）

出土遺物は弥生土器・黒曜石チップが出土したが、いずれも小片のため図化できなかった。

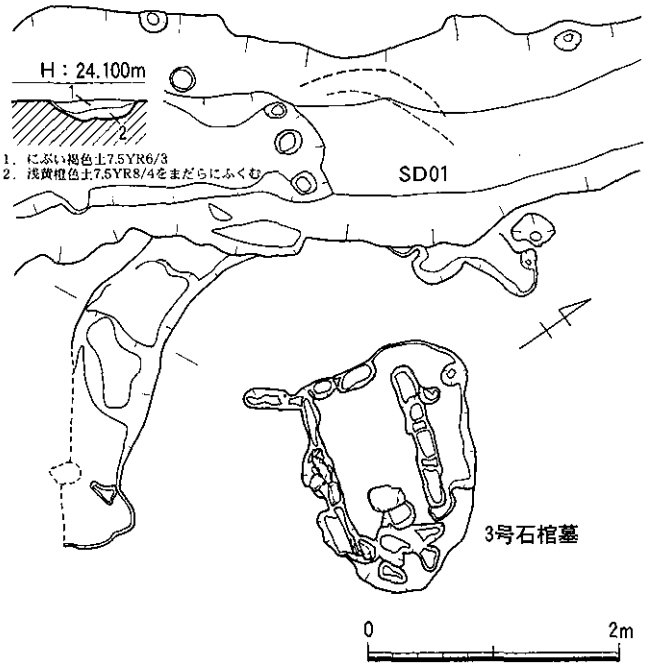
（５）土坑

ＳＸ20（第15図、図版２・８・９）

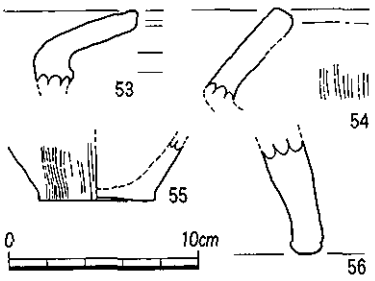
調査区の西端部で検出され、畑の耕作に伴うトレンチに切られるが、トレンチより南側にはのび



第12図　ＳＸ03実測図（1/60）



第14図　ＳＸ22実測図（1/60）



第13図　ＳＸ03出土遺物実測図（1/4）

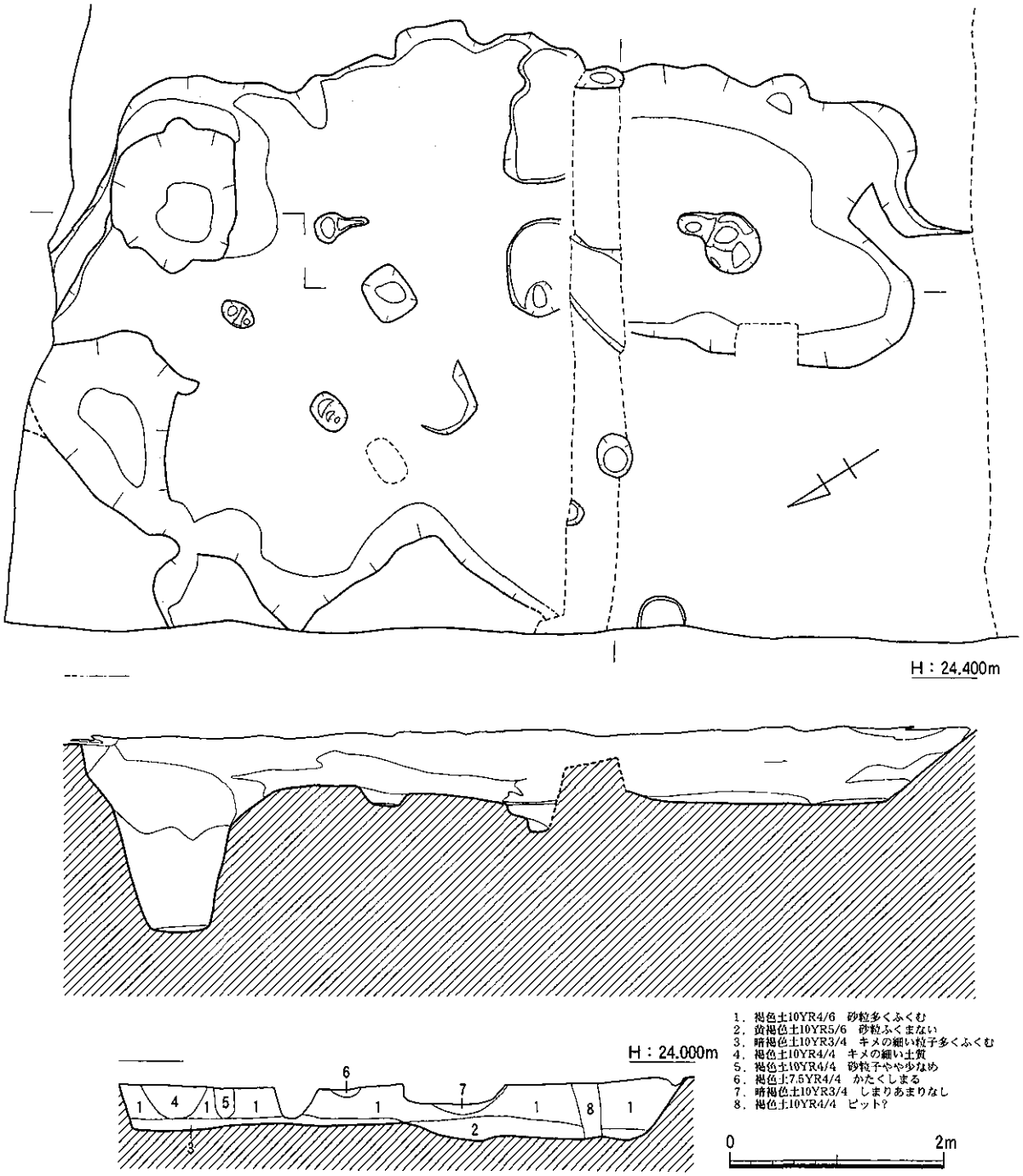
ていない。調査時遺構検出をおこなった際、遺構の縁は検出できたが、遺物を含んだ褐色土が長さ8.25×幅5.25ｍの範囲で認められた。平面プランは不整で、一部は調査区の西側へのびている。遺物はまとまりを持って点在していたため、複数の土坑が切り合っているものと考えて検出面での精査に努めたが、褐色土内で遺構の切り合いを確認することができず、やむをえず検出面より１段ずつ下げながら遺構の切り合いと形状の把握に努めた。しかし、結局遺構同士の切り合いは確認できなかった。また、土坑の北東隅では床面より長さ約1.45×幅1.15m、深さ約1.00mの略方形プランの土坑が検出された。土坑はほぼまっすぐに掘り込まれ、井戸のような掘り方であった。

出土遺物（第16～21図、図版12～14）

土坑中からは弥生土器が最も多く出土し、その他少量の瓦器・磁器の細片が出土した。瓦器などの遺物は畑の耕作の際に混入したものと思われる。弥生土器は、多数の祭祀土器および完形に近い遺物が出土したが、調査の不手際により出土状況の図化および写真撮影をおこなっていない。また、弾けたような痕のある土器も多く、焼土塊も含まれている。

57～84は祭祀土器。57～60は甕。57・58は口縁部平坦面に暗文を施す。58～60は口縁端部にキザミ目を施す。61～69は短頸壷。61は口縁部が平らで、内面は剥落が著しいが一部丹塗りが残っている。62は口縁端部内側が稜をなし、外面の一部に丹が残っているように見えるが全面施されていたようには思えない。63は口縁部内側が丸く、体部は直立に近い。64～66は口縁部が内傾し、体部が球形に近い。66は口縁部に４孔が向かい合って施されており、孔の観察から上から下へ刺突されている。器壁の剥落が著しいが、器形より祭祀土器と判断した。67は逆Ｌ字状を呈する口縁を有し、胴部はあまり張らない。68・69は底部片である。

70～73は広口壷。70は器壁の荒れが著しく、外面しか丹塗りの痕跡を確認できない。73は内面に



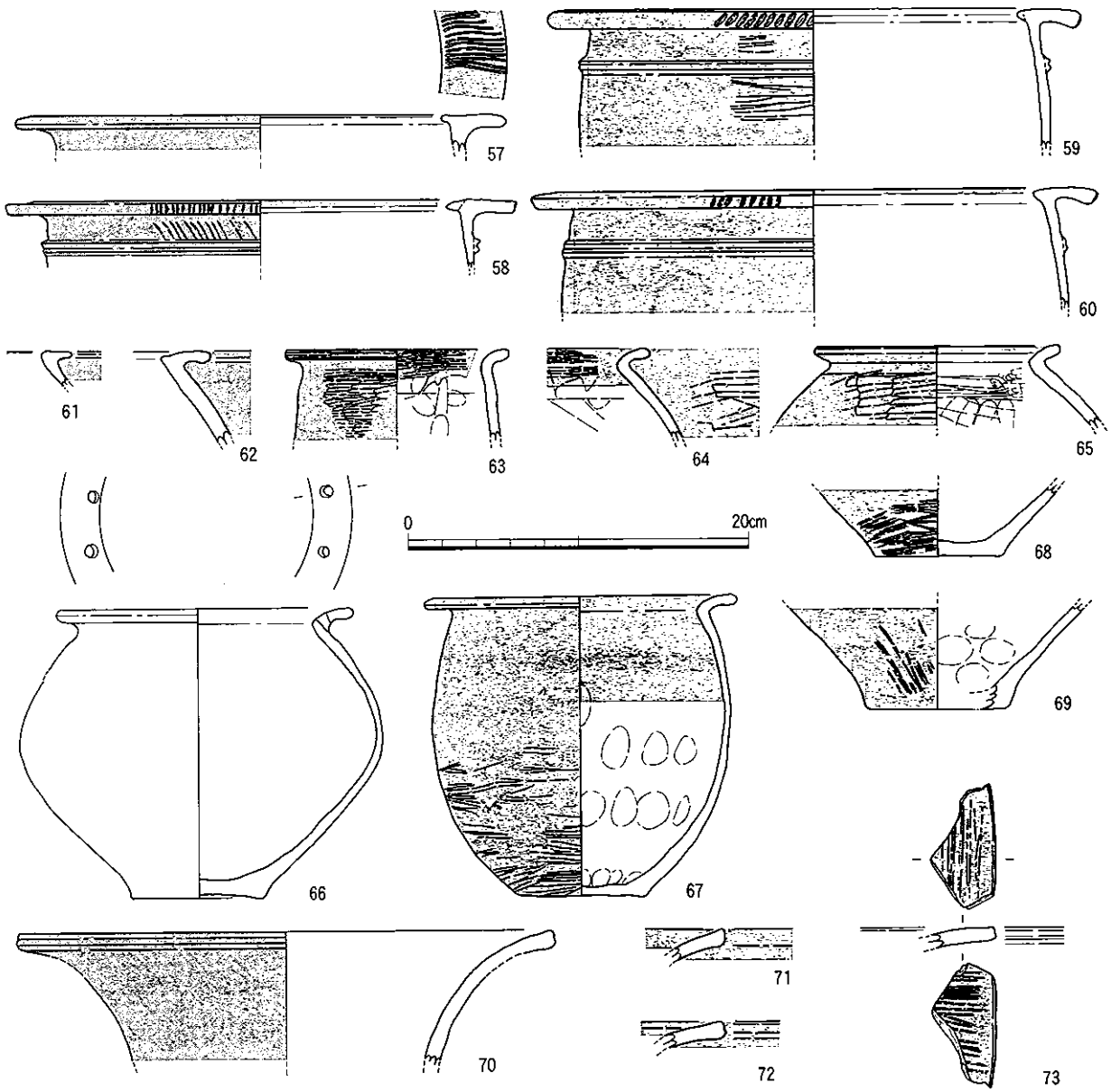
第15図　ＳＸ20実測図・土層実測図（1/60）

横方向、外面に縦方向のミガキを施す。

74は瓢形壷。頸部から胴部中位にかけて６条の突帯を施す。75は胴部片。M字突帯を１条巡らせる。

76～83は高杯。79は外面には丹塗りが見られない。80～83は脚部で、いずれも外面のみ丹塗りされる。84は体部外面にタテ方向のミガキが密に施され、頂部は円周方向にミガキが施される。

85～172は日常土器。85～140は甕。85～105は口縁部のみの資料。85は如意形に屈曲する口縁をもち、他のくの字状口縁とは区別できる（口縁Ａ）。86～89は口縁部内側が丸く仕上げられ、口縁端部に向かってわずかに下垂する（口縁Ｂ）。90～94は逆Ｌ字状の口縁（口縁Ｃ）。95･96は口縁部平坦面が強くナデられ、水平で略三角形状の断面をとる（口縁Ｄ）。97･98は口縁部平坦面は丸く、内側

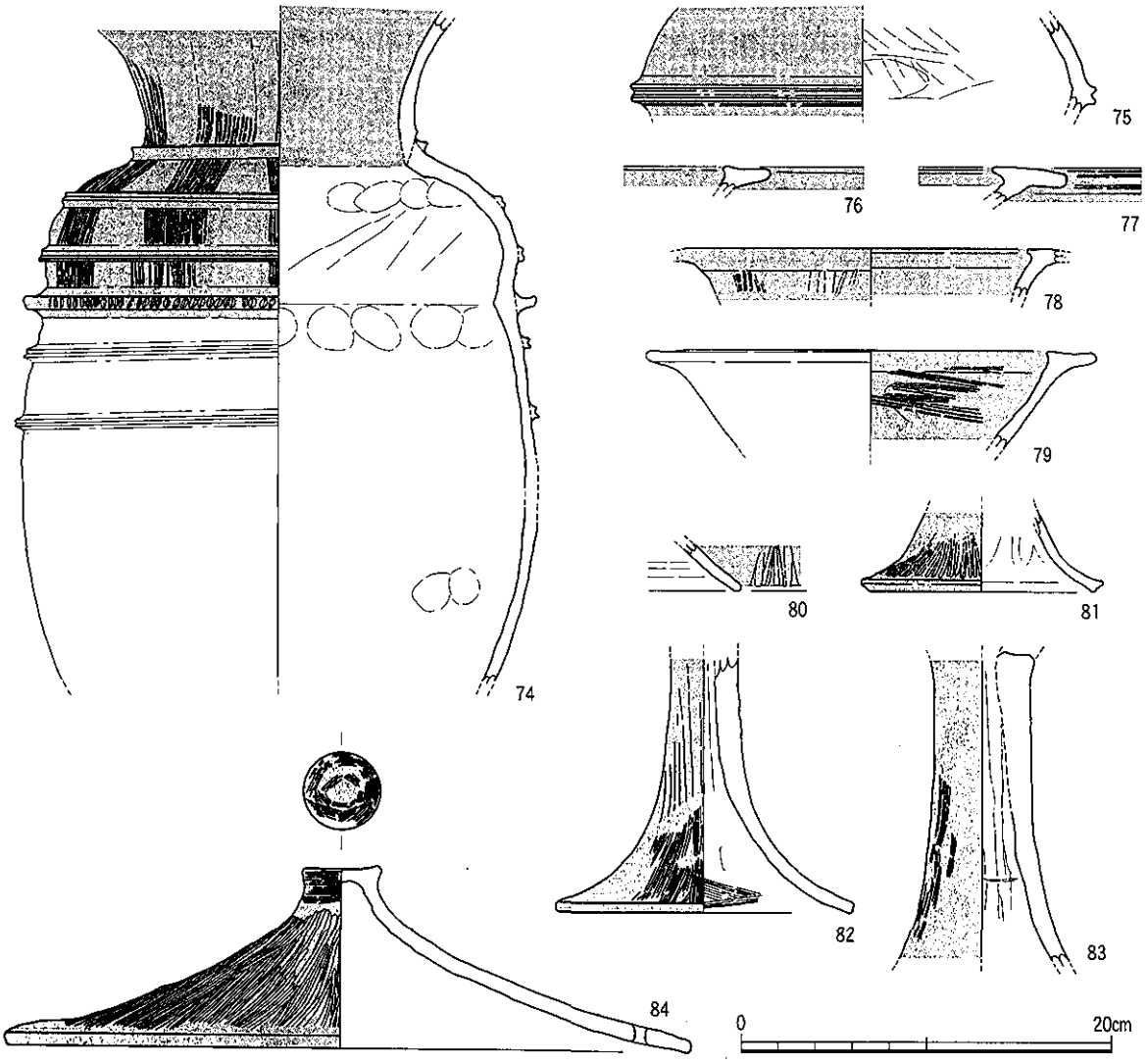


第16図　ＳＸ20出土遺物実測図①（1/4）

は明確な稜をもつ（口縁Ｅ）。99•104•105はわずかに内傾し、口縁部内側はコの字状を呈するものと断面三角形状になり稜を持つものとがある（口縁Ｆ）。100～103は口縁部内側をつまみ出し、端部はやや下がる（口縁Ｇ）。

106～125は口縁部径を復元できた資料。106は口縁Ｂをとり、胴部上半に最大径をとる。107～114は口縁Ｃをとるが、107•108は胴部が張らない形態をとるようである。109～114はやや張りのある胴部で、113•114は断面三角形の低い突帯を口縁部に近い所につける。115～117は口縁Ｄ。胴の張る形態をとるようである。118～120・124は口縁Ｅ。121～123は口縁Ｆで胴の張りは強い。123は口縁部下に低い三角突帯をつける。125は口縁部内側は欠損するが、端部が断面三角形状になり、口縁部平坦面は強くナデられ水平となる。126～137は甕の底部。いずれも平底で薄い。胴が張らずに直線的になるもの（132～134）とふくらみをもつもの（135～137）に分かれる。

138・139は中型甕。138はくの字状口縁を呈し、口縁部内側は突出し稜をなす。最大径は胴部中位



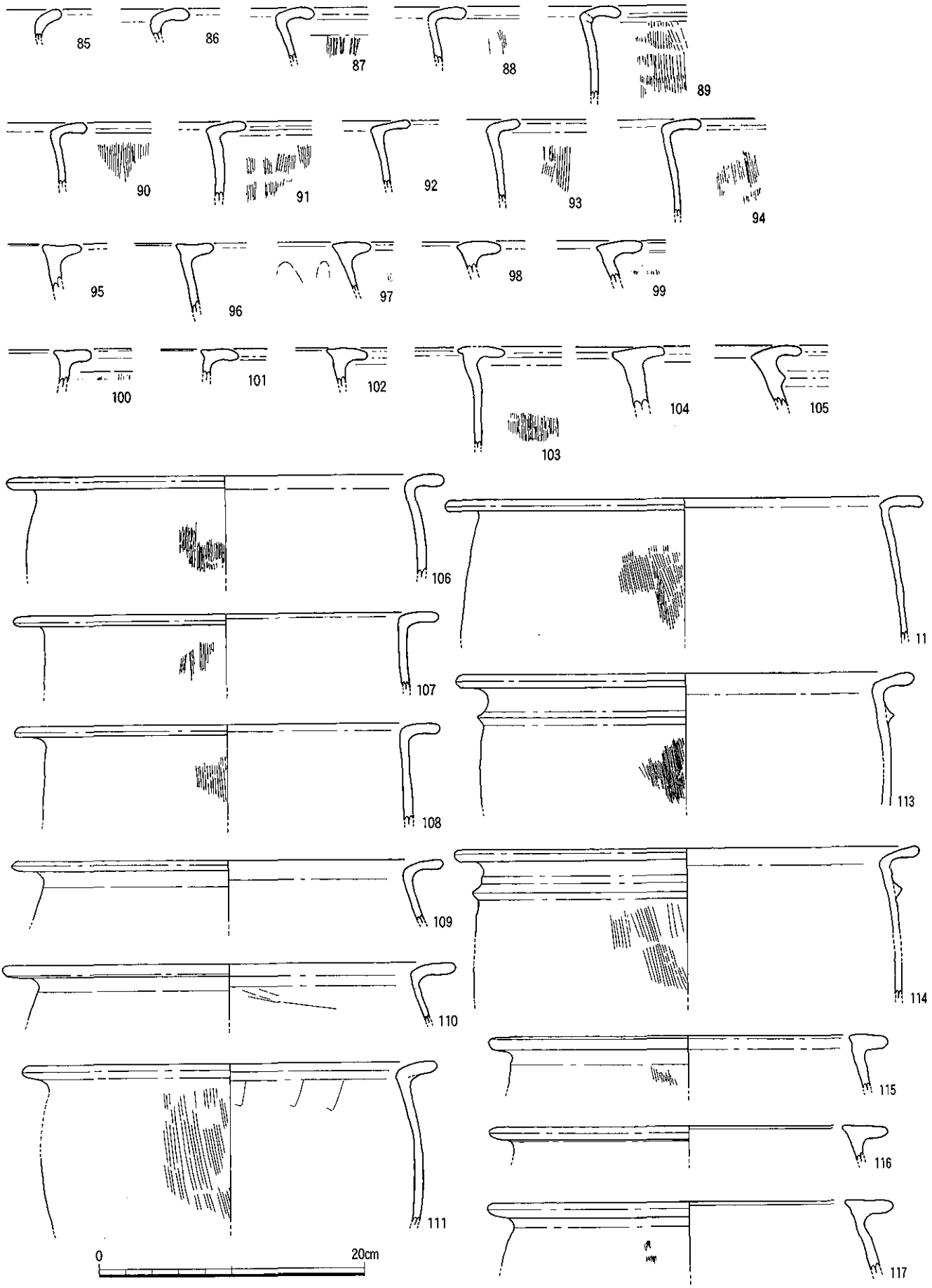
第17図　ＳＸ20出土遺物実測図②（1/4）

よりやや上にあり、底部は平底。139は口縁部が内傾し、内側は稜をなす。底部は失われているが、最大径は胴部上半にある。140は甕棺。口縁部から胴部上半を図化したが、他に２条の高い三角突帯を有する胴部片がある。口縁部内側は突出し、丸く、わずかに内傾する。端部は丸く、胴の張りは非常に強い。ＫⅢｃ式にあたる。

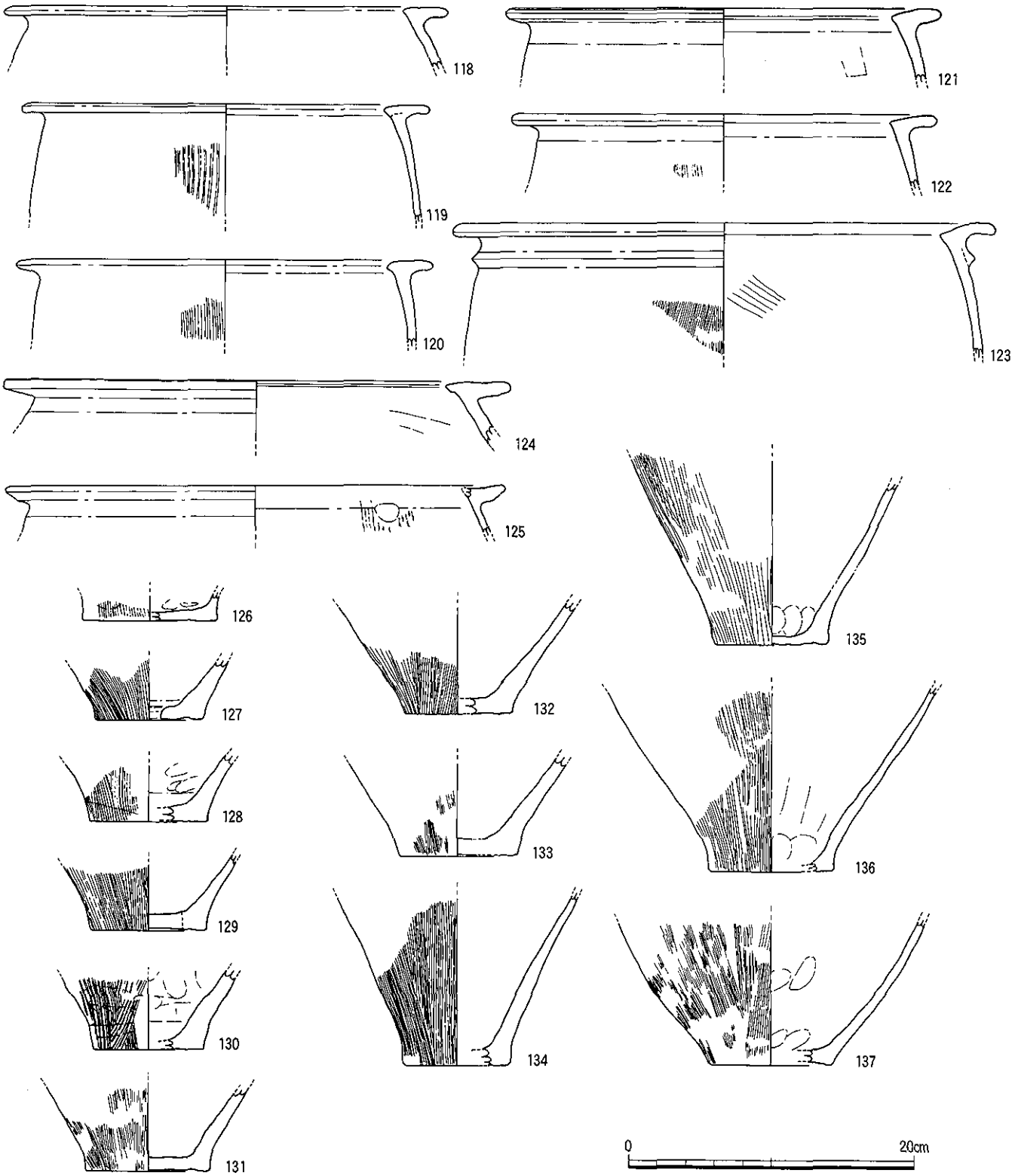
141・144～150は壷類。141は鋤先口縁をもつ広口壷。口縁部は外傾し、棒状の浮文をつける。144は瓢形壷。低い突帯を２条つける。145は壷であるが形態がつかめない。外面は横方向にミガかれ、低い三角突帯をつける。図面で下にした方に屈曲部がありこちら側が上になるかと思ったが、突帯のつけ方と雰囲気から図のようにした。外面丹塗りの可能性がある。146～150は底部。

142・143は高杯。151～160は器台。外面にタテ方向のハケを施し、口縁端部・脚端部を面取りする。158～160は完形品。161～165は支脚。手づくねで指頭痕が残る。いずれも器壁はボロボロである。166～168は鉢。166は167・168に比べて大型で、椀状を呈し、口縁部は丸くおさまる。167は椀形の胴部中位に三角突帯を１条巡らす。168はコップ状を呈し、口縁部には指頭痕が残る。

169は砥石。層位的には確認していないが、170～172は後世の混入と考えられる。170・171は瓦器椀片。172は陶器壷の胴部片である。



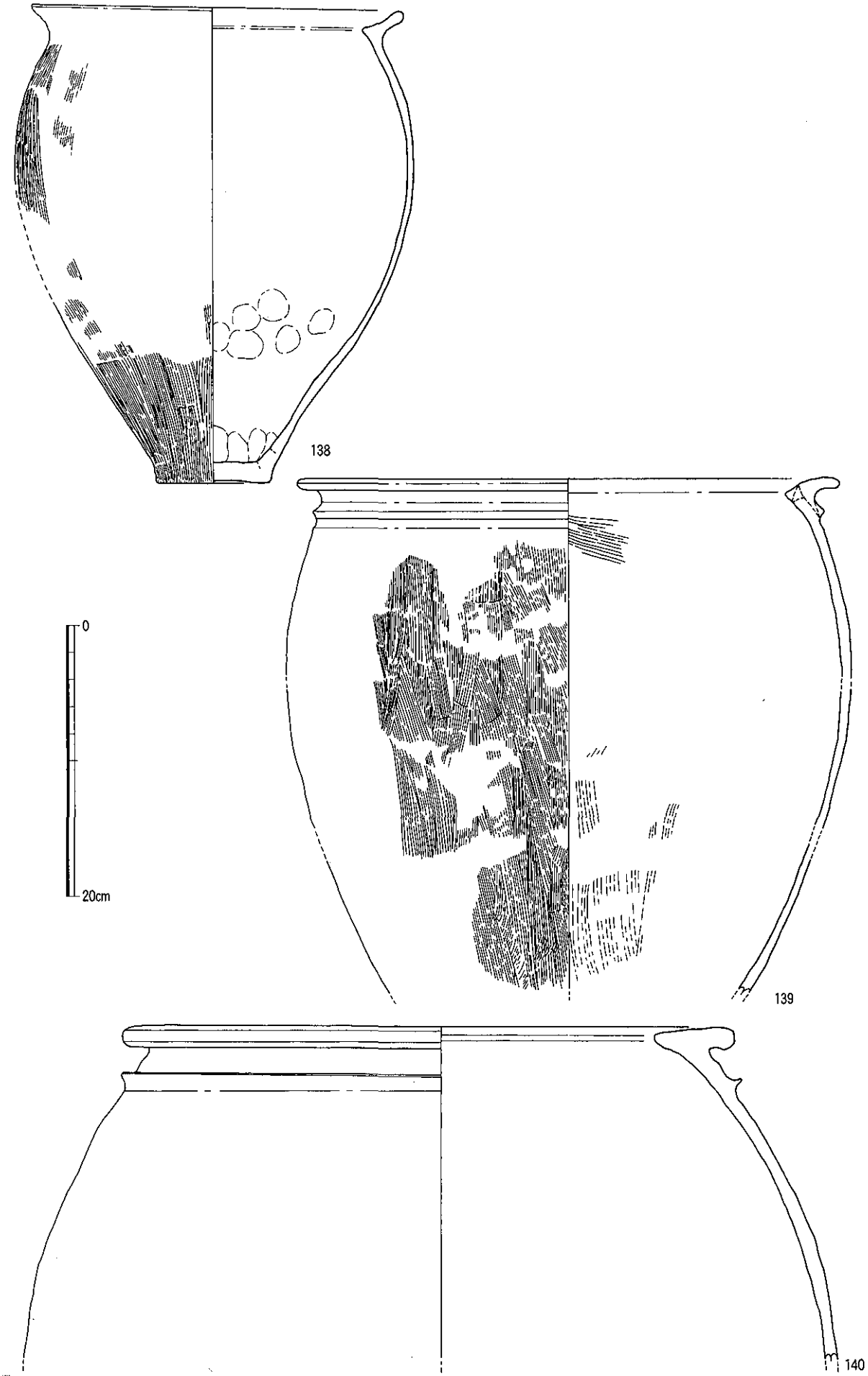
第18図　ＳＸ20出土遺物実測図③（1/4）



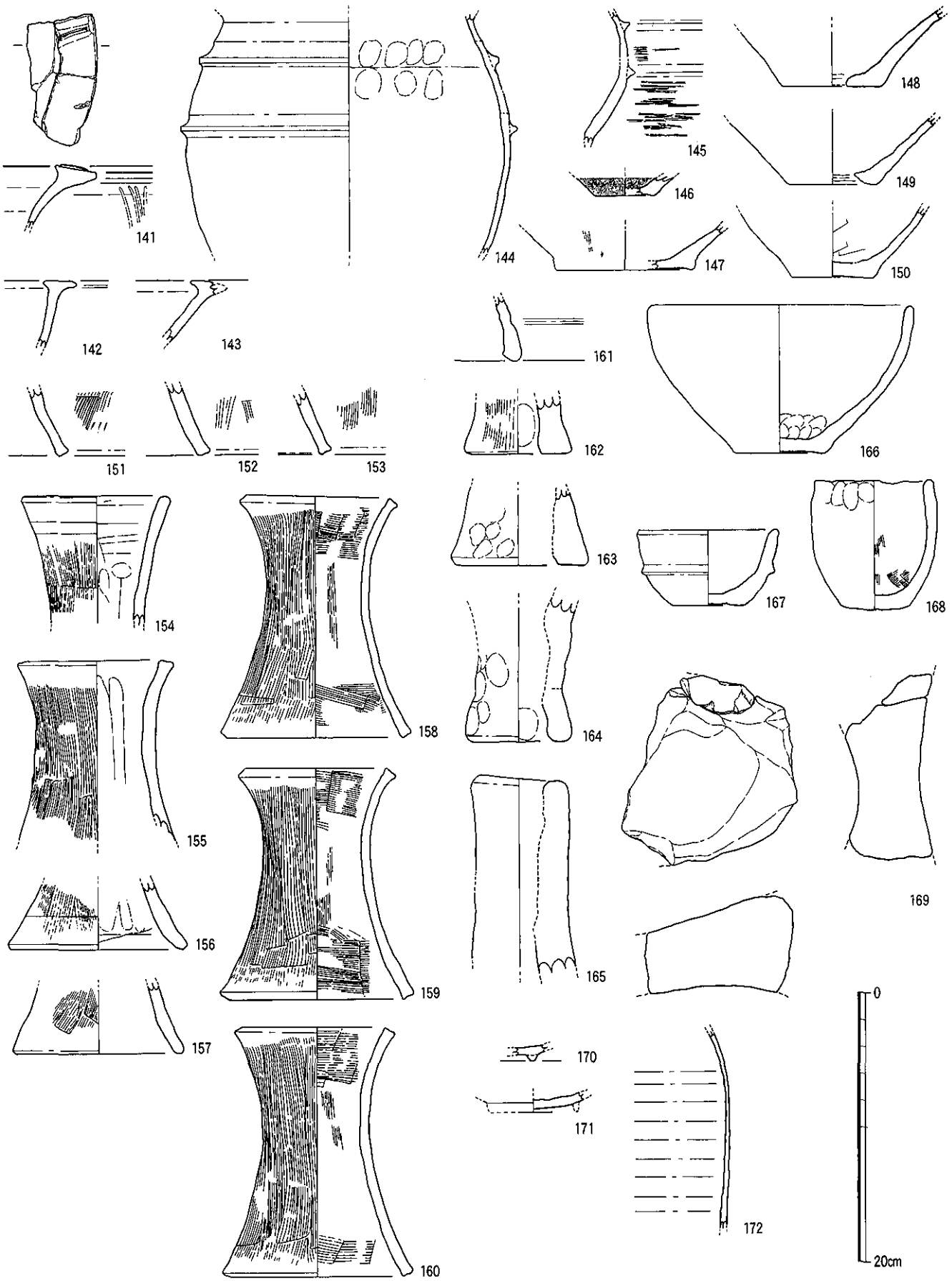
第19図　ＳＸ20出土遺物実測図④（1/4）

（５）　その他の出土遺物

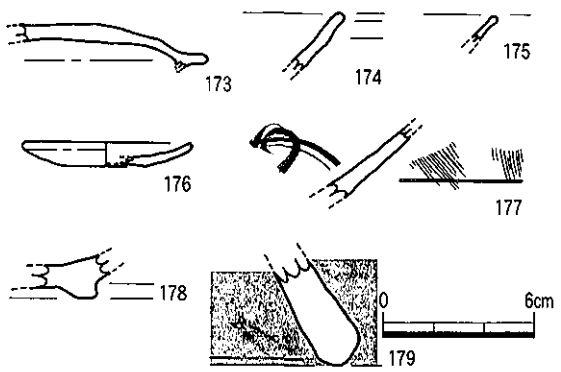
ここでは調査区内のピット・土坑から出土した遺物のうち、弥生土器以外の遺物を取り上げている。取り上げた遺構はいずれも浅く、不整形なため性格が不明であった。このため、調査区と周辺の歴史的環境の一端を明らかにする目的で図化および記述をおこなうものである。



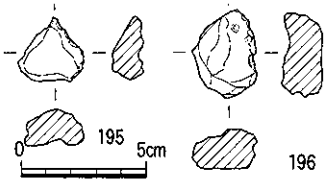
第20図　ＳＸ20出土遺物実測図⑤（1/4）



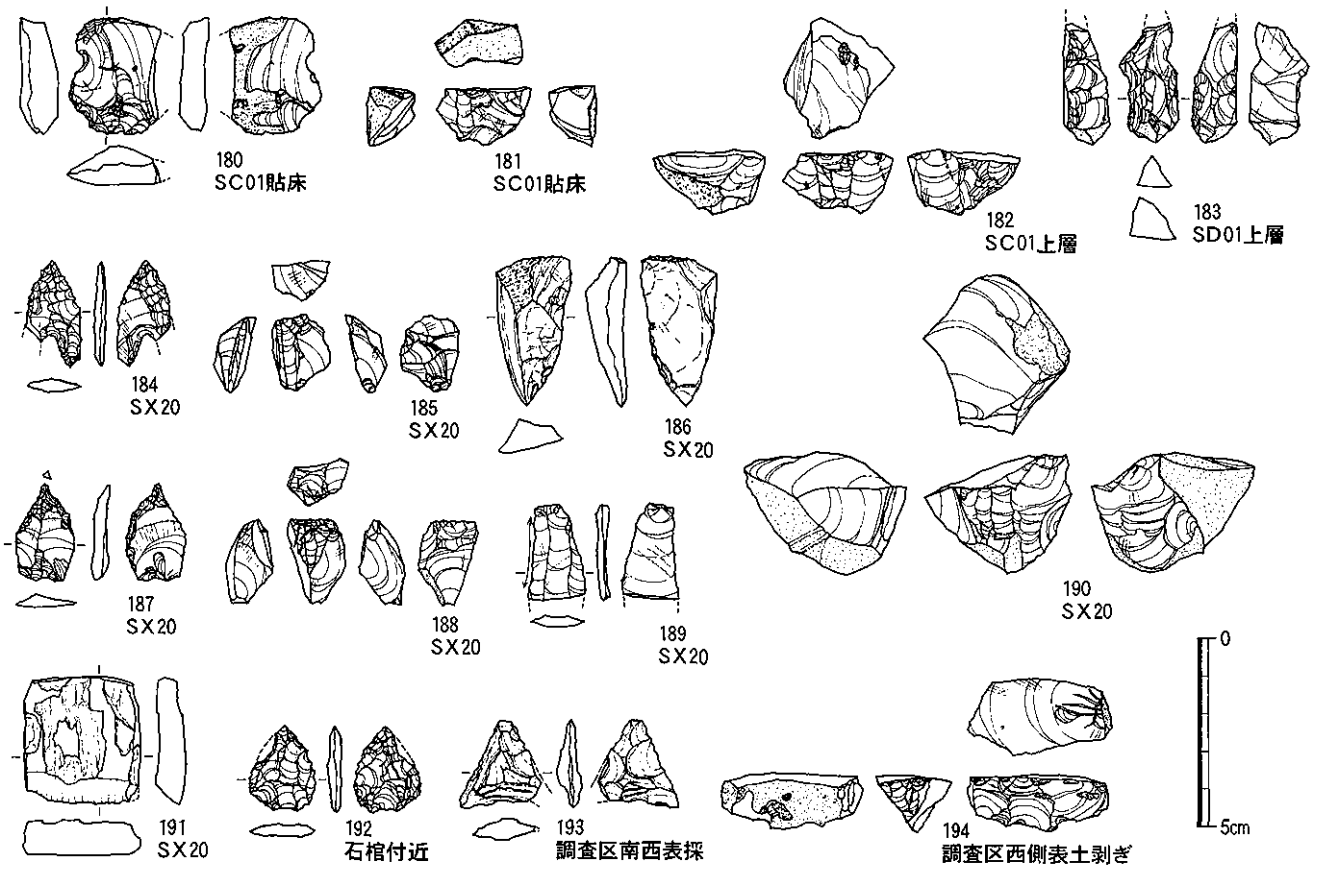
第21図　ＳＸ20出土遺物実測図⑥（1/4）



第22図　その他の出土遺物実測図(土器類)(1/3)



第23図　その他の出土遺物実測図(鉄滓)(1/3)



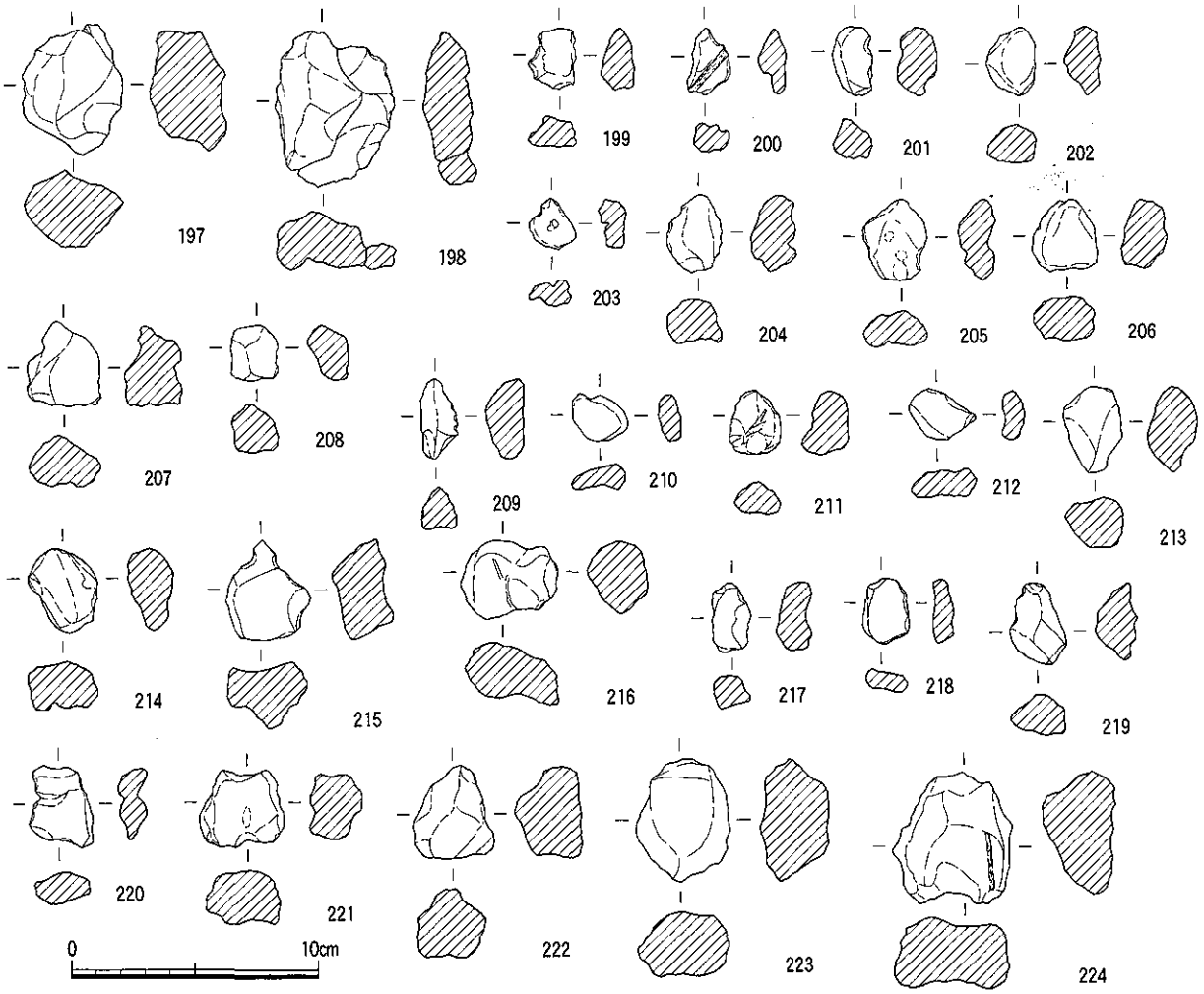
第24図　その他の出土遺物実測図（石器）（1/2）

①土器類（第22図・図版14）

173はSX02出土。須恵器杯蓋。小片のため接合に不安があるが、焼けひずんでいる。174・175はSP77出土。いずれも瓦器椀の小片で、わずかに端部を外反させる。176はSX21出土。底部糸切りの土師器小皿で、口径に対し底径が非常に小さい。177は畑の耕作トレンチ出土。同安窯系青磁椀である。178はSP85出土。白磁椀。179は畑の耕作トレンチ出土。器種不明で天地・傾きに難があるが、内外面とも丹塗りを施している。

③鉄滓（第24図・図版14）

2点出土している。195はＳＰ28出土。同じ遺構より瓦器が出土している。196は同じ遺構より土師器糸切り小皿が出土している。



第25図　その他の出土遺物実測図（焼土塊）（1/3）

②石器（第23図・図版11）

180はスクレーパー。背面に礫面をもち刃部加工は腹面のみから施される。黒曜石製。181・182は石核。いずれも小ぶりな角礫を素材とする。181は作業面以外、182は底面の一部に礫面を残す。いずれも黒曜石製であるが、181はやや風化し、182は不純物を多く含む。183は三稜尖頭器。ややいびつで小ぶりな形状を呈する。正面・左面の稜部には潰れたような使用痕が認められ、削器として転用された可能性が高い。風化が進む。黒曜石製。後期旧石器時代。184は石鏃。素材面を大きく残す。黒曜石製。185は楔形石器。黒曜石製。186はスクレーパー。右側縁の一部に両側から二次加工を施す。安山岩製。187は石錐。縦長の剥片の下端部を加工し、刃部とする。黒曜石製188は楔形石器。黒曜石製。189は縦長剥片。側縁部に使用痕らしき微細剥離痕あり。黒曜石製。190は石核。角礫を素材とし、背面から底面にかけて礫面を残す。黒曜石製。191は扁平片刃石斧。素材に凹凸があり凹部に研磨は及ばない。蛇紋岩製。192・193は石鏃。192は脚部を持たない円基式で黒曜石製。193は正三角形に近い形状を呈し風化が進む。安山岩製。194は石核。礫面を有する剥片を素材とする。黒曜石製。

④焼土塊（第25図・図版10）

図化したものが調査区内より出土した焼土塊のほぼすべてである。大小あるが、いずれも橙色か

ら浅黄橙色を呈し、一部灰白色を呈する部分もある。稲もしくは草本類の圧痕が残されており、胎土には径１～５㎜程度の白色石粒を含む。一部にナデの痕跡のようなものが残されるものもあるが、判然としない。SD01・SX20・SP80・81などから出土しており、SP80・81の出土遺物には瓦器・瓦が含まれている。

出土遺物観察表（土器類）

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量①口径③底径 cm ②器高④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
1	弥生土器	甕	SC01埋土上層		外面ヨコ方向のミガキ・ヨコナデ。内面ナデ。	A やや粗 B 良好 C 内橙色（2.5YR6/8）外赤褐色（2.5YR4/6）	外面丹塗り
2	〃	壷	〃	③（6.8）	外面調整不明、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内にぶい橙色（7.5YR6/4）外明赤褐色（2.5YR5/8）	外面丹塗り
3	〃	甕	〃	①（29.0）	外面タテハケ内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内橙色（5YR7/6）外にぶい橙色（5YR6/4）～にぶい黄橙色（10YR6/3）	
4	〃	高杯？	〃		外面タテハケ 内面ナデ	A 良 B 良好 C にぶい橙色（7.5YR6/4）	
5	〃	甕	SC01埋土下層		外面ヨコナデ、 内面ナデ（一部ヘラナデ）	A 良 B 良好 C 内にぶい橙色（7.5YR7/4）外にぶい黄橙色（10YR7/3）	
6	〃	甕	SC01埋土下層	①（25.0）	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面タテハケ	A やや粗 B 良好 C 内にぶい橙色（7.5YR7/4）外にぶい黄橙色（10YR7/3）	外面スス付着
7	〃	広口壷	SC01埋土下層		外面タテ方向の暗文、内面ヨコ方向のミガキ	A 良好 B 良好 C 赤（10R5/8）	内外面丹塗り
8	〃	高杯	〃		磨滅のため調整不明	A やや粗 B やや不良 C 浅黄橙色（10YR8/3）～赤褐色（2.5YR4/8）	内外面丹塗り
9	〃	〃	〃		磨滅のため調整不明	A やや粗 B やや不良 C 内外赤褐色（2.5YR4/8）～浅黄橙色（10YR8/4）	内外面丹塗り
10	〃	不明	SC01内 P4		外面ヨコナデ、内面ナデ。	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	内面破裂痕？
11	〃	甕	SD01上層		内外面ナデ	A 良 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR6/3）	
12	〃	壷？	〃		磨滅のため調整不明	A 良 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
13	〃	甕	〃		磨滅のため調整不明	A 良 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	
14	〃	甕棺？	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 内外にぶい黄橙色（10YR7/4）	
15	〃	甕	〃		内外面ヨコナデ、一部ヨコハケ	A やや粗 B 良好 C 内外橙色（7.5YR6/6）	口縁端部キザミ
16	〃	〃	〃		内外面ナデ、外面タテハケ	A やや粗 B 良好 C 内黄灰色（2.5Y6/1）外にぶい橙色（7.5YR7/4）	
17	〃	〃	〃		外面タテハケ、底部外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 黄灰色（2.5Y6/1）	内面破裂痕？
18	〃	甕？	〃		外面ナデ、内面ハケ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR6/3）	
19	〃	袋状口縁壷	〃		内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR6/4）	
20	〃	壷	〃		内外面ナデ調整	A 良 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	
21	〃	不明	〃		内面剥落、外面ナデ。	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	
22	〃	甕	SD01下層		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
23	〃	〃	〃		内外面ナデ調整	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR7/8）	口縁部破裂痕？
24	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/8）	
25	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい橙色（7.5YR7/4）	
26	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 灰黄褐色（10YR6/2）	
27	〃	〃	〃		内外面ナデ調整	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR6/3）	口縁部破裂痕？
28	〃	〃	〃		内面ナデ、口縁部ヨコナデ、外面タテハケ	A 良 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	
29	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR7/6）	
30	〃	〃	〃		内面剥落、外面タテハケ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量①口径③底径 cm ②器高④最大径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備　考
31	〃	〃	〃	③（8.0）	内面・底部外面ナデ、外面タテハケ	A やや粗 B 良好 C 内外にぶい黄橙色（10YR6/4）底部外面橙色（5YR6/8）	
32	〃	〃	〃	③（7.7）	内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
33	〃	壷	〃	③（8.4）	内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	底部黒斑
34	〃	〃	〃	③（9.6）	内面ナデ、底部外面ナデ、外面タテ方向のミガキ	A 精良 B 良好 C 内橙色（5YR6/6）外赤褐色（10R4/4）	外面丹塗り
35	〃	支脚	〃	脚部径（17.7）	内面ナデ、外面タテハケ	A やや粗 B やや不良 C 内明赤褐色（2.5YR5/8）外にぶい黄橙色（10YR7/4）～明赤褐色（2.5YR5/8）	
36	〃	甕？	〃		内面剥落、外面ナデ,	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	内面破裂痕？
37	〃	甕？	〃		内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
38	〃	支脚？	〃		内外面ナデ	A 良 B 良好 C 橙色（5YR7/6）	
39	〃	壷	〃		内面ナデ、外面タテハケ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
40	〃	ミニチュア土器	〃	①1.3②3.1③1.6	手づくね	A 良 B 良好 C にぶい黄橙色（10Y7/4）	
41	〃	甕	〃		内外面ナデ	A 良 B 良好 C にぶい橙色（7.5YR7/4）	
42	〃	〃	〃		内外面ナデ、一部内面タテハケ	A やや粗 B 良好 C 橙色（2.5YR6/8）	
43	〃	壷	〃	③（6.2）	内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	
44	〃	甕	〃	③（8.9）	剥落により調整不明	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
45	〃	高杯	〃		内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 明赤褐色（5YR5/6）	
46	〃	壷	〃		内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 明赤褐色（2.5YR5/6）	
47	〃	〃	〃		内面ナデ、外面タテハケ	A やや粗 B 良好 C 内橙色（7.5YR6/6）外橙色（5YR6/6）	
48	〃	〃	〃		内外面タテハケ、内面一部ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（2.5YR6/6）	
49	〃	甕	〃		内外面剥落	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	
50	鉄器	刀子	1号石棺墓	残存長12.3cm 最大幅1.2cm 厚さ　0.5cm	樹皮？の痕跡あり		
51	〃	鉄鏃	〃	残存長15.1＋α cm 最大幅0.8cm 厚さ　0.3cm			
52	〃	〃	〃	残存長　13.9cm 鏃身長3.2cm 頸部長6.8cm	茎部木質残		
53	弥生土器	甕	SX03		内外面ナデ調整	A 粗 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	内面破裂痕？
54	〃	〃	〃		内面～口縁部ナデ、外面粗いタテハケ	A やや粗 B 良好 C 灰黄色（2.5Y6/2）	
55	〃	〃	〃	③（6.0）	底部ナデ、底部付近指ナデ、外面タテハケ	A 粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/2）	黒斑あり、内面破裂痕？
56	〃	支脚？	〃		内面ナデ、外面ハクラク	A 粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	
57	〃	甕	SX20	①（28.8）	内外面ナデ（一部ミガキか？） 口縁部平坦面暗文	A 精良 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	外面～内面口縁部丹塗り
58	〃	〃	〃	①（29.9）	外面ミガキ、内面ナデ、口縁部平坦面暗文、口縁部端部キザミ目	A 精良 B 良好 C 橙色（5YR7/8）	外面～内面口縁部丹塗り
59	〃	〃	〃	①31.1	口縁部にキザミ目、外面ミガキ, 内面ナデ	A 精良 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	外面丹塗り
60	〃	〃	〃	①（33.0）	口縁部キザミ目、内外面調整不明	A 精良 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	外面～内面口縁部丹塗り
61	〃	短頸壷	〃		外面ミガキ、内面ナデ	A 精良 B 良好 C にぶい橙色（7.5YR7/4）	外面丹塗り
62	〃	〃	〃		外面ミガキ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	外面一部丹残る
63	〃	〃	〃	①（13.2）	外面～内面口縁部ミガキ、内面ナデ	A 粗 B 良好 C にぶい橙色（7.5YR7/4）	外面～内面口縁部丹塗り
64	〃	〃	〃		外面～内面口縁部ミガキ、内面ナデ	A 精良 B 良好 C 橙色（5YR7/6）	外面～内面口縁部丹塗り
65	〃	〃	〃	①（14.4）	体部内外面ミガキ、口縁部内外面ナデ	A 精良 B 良好 C 橙色（5YR7/6）	外面～内面口縁部丹塗り
66	〃	〃	〃	①17.3②17.0③7.8④21.3	口縁部4ヶ所に穿孔 外面胴部上半ミガキ、下半部・内面ナデ	A 精良 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	底部付近黒斑、頸部付近に丹塗りの痕跡

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量①口径③底径 cm ②器高④最大径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備　考
67	〃	〃	〃	①18.4②17.6③7.4	外面横方向ミガキ、内面上部ナデ、下部指ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	底部付近に黒斑あり。 外面～内面上部丹塗り
68	〃	〃	〃	③（7.4）	外面ミガキ、内面ナデ	A 精良 B 良好 C 灰黄色（2.5Y7/2）	外面丹塗り
69	〃	〃	〃	③（7.8）	外面ミガキ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	外面丹塗り
70	〃	広口壺	〃	①（31.6）	外面ミガキ、内面調整不明	A 良 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	外面丹塗り
71	〃	〃	〃		内外面調整不明	A 精良 B 良好 C 橙色（5YR7/6）	内外面 丹塗り
72	〃	〃	〃		内外面調整不明	A 良 B 良好 C 赤褐色（2.5YR4/6）	内外面 丹塗り
73	〃	〃	〃		内外面ミガキ、外面暗文	A 良 B 良好 C 橙色（5YR6/8）	内外面 丹塗り
74	〃	瓢形壺	〃		内面ナデ、外面ミガキ後一部タテ方向の暗文	A 精良 B 良好 C 浅黄橙色（7.5YR8/6）～橙色（7.5YR6/6）	内外面上部丹塗り
75	〃	壺	〃		外面調整不明、内面ナデ	A 粗 B やや不良 C 外暗赤褐色（2.5YR3/6）内灰色（5Y5/1）	外面丹塗り
76	〃	高杯	〃		内外面調整不明	A やや粗 B 良好 C 浅黄橙色（10YR8/3）	一部丹塗り残
77	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 明赤褐色（2.5YR5/8）	内外面 丹塗り
78	〃	〃	〃		口縁上面に暗文施す。外面はミガキ・ナデ、内面はヨコナデ。	A 粗 B 良好 C 赤褐色（2.5YR4/6）	内外面 丹塗り
79	〃	〃	〃	①（24.2）	内外面調整不明	A 良 B 良好 C 褐灰色（7.5YR4/1）～浅黄色（2.5Y7/3）	内面丹塗り
80	〃	〃	〃		外面ミガキ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 外赤褐色（2.5YR4/8）内橙色（5YR6/8）	外面丹塗り
81	〃	〃	〃		外面ミガキ、内面ナデ	A 精良 B やや不良 C 明赤褐色（2.5YR5/8）	外面丹塗り
82	〃	〃	〃	③16.0	外面ミガキ、内面ナデ	A 精良 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	外面丹塗り
83	〃	〃	〃		外面ミガキ、内面ナデ、シボリ痕あり	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	外面丹塗り
84	〃	蓋	〃	①36.8②9.8～10.0 つまみ径4.2	頂部円周方向、外面タテ方向のミガキ、2 箇所に穿孔あり。	A 精良 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	外面丹塗り
85	〃	甕	〃		内外面ナデ	A 良 B 良好 C 灰褐色（7.5YR5/2）	
86	〃	〃	〃		内外面調整不明	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
87	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（2.5YR6/8）	
88	〃	〃	〃		外面調整不明、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	
89	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	
90	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 明赤褐色（2.5YR5/6）	
91	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい橙色（7.5YR7/4）	
92	〃	〃	〃		内外面調整不明	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
93	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内灰黄色（2.5Y7/2）外灰黄褐色（10YR5/2）	煤付着
94	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（2.5YR6/8）	
95	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内橙色（5YR7/6）外橙色（5YR7/6）	外面煤付着
96	〃	〃	〃		内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 浅黄色（2.5Y7/3）	
97	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	
98	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 外にぶい黄橙色（10YR7/4）～褐灰色（10YR5/1）内灰白色（2.5Y8/2）	
99	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/8）	
100	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	口縁部一部破裂痕？
101	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい橙色（7.5YR6/4）	
102	〃	〃	〃		内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	
103	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
104	〃	〃	〃		内外面調整不明	A やや粗 B 良好 C 浅黄色（2.5Y7/3）	

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量①口径③底径 cm ②器高④最大径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備　考
105	〃	〃	〃		内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	
106	〃	〃	〃	①（33.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A 良 B 良好 C 淡赤橙色（2.5YR7/4）	
107	〃	〃	〃	①（31.9）	外面タテハケ、内面ナデ	A 良 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
108	〃	〃	〃	①（31.9）	外面タテハケ、内面ナデ	A 良 B 良好 C 橙色（5YR7/8）	内面一部破裂痕？
109	〃	〃	〃	①（32.4）	内外面調整不明	A 良 B 不良 C にぶい橙色（7.5YR6/4）	
110	〃	〃	〃	①（34.0）	内外面調整不明	A 良 B 不良 C にぶい橙色（7.5YR6/4）	
111	〃	〃	〃	①31.2	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 淡黄色（2.5Y8/4）	破裂痕？
112	〃	〃	〃	①（36.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A 良 B 良好 C 橙色（2.5YR6/6）	
113	〃	〃	〃	①（34.3）	外面タテハケ、内面ナデ	A 良 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	
114	〃	〃	〃	①（35.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A 良 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	外面煤付着
115	〃	〃	〃	①（30.0）	内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 黄橙色（10YR8/6）	
116	〃	〃	〃	①（30.0）	内外面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
117	〃	〃	〃	①（30.4）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内にぶい黄橙色（10YR6/3）外黄灰色（2.5Y4/1）	外面煤付着
118	〃	〃	〃	①（31.0）	内外面調整不明	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	
119	〃	〃	〃	①（29.8）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（2.5YR6/6）	
120	〃	〃	〃	①（29.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 明赤褐色（2.5YR5/6）	
121	〃	〃	〃	①（30.4）	内外面ナデ	A 粗 B やや不良 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	
122	〃	〃	〃	①（29.8）	内外面ナデ	A 粗 B やや不良 C 橙色（5YR6/8）	
123	〃	〃	〃	①（38.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A 良 B 良好 C にぶい褐色（7.5YR5/4）	
124	〃	〃	〃	①（35.4）	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	A 粗 B 良好 C 内褐灰色（10YR4/1）外にぶい黄橙色（10YR7/3）	内面一部破裂痕？
125	〃	〃	〃	①（34.8）	内外面ナデ	A 良 B やや良好 C 浅黄橙色（10YR8/4）	
126	〃	〃	〃	③（9.3）	外面タテハケ、内面ナデ	A 粗 B やや良好 C 内黒褐色（2.5Y3/1）外橙色（5YR6/8）	
127	〃	〃	〃	③（7.4）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/8）	底部穿孔？
128	〃	〃	〃	③（8.2）	外面タテハケ、内面ナデ	A 粗 B やや良好 C 内にぶい黄橙色（10YR6/4）外にぶい黄褐色（10YR5/4）	
129	〃	〃	〃	③（8.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A 粗 B 良好 C 内褐灰色（10YR5/1）外灰黄褐色（10YR6/2）	
130	〃	〃	〃	③（7.7）	外面タテハケ、内面ナデ	A 粗 B やや良好 C 内にぶい黄橙色（10YR6/4）外黒褐色（10YR3/1）～暗褐色（10YR3/4）	
131	〃	〃	〃	③（8.6）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（2.5YR6/6）	
132	〃	〃	〃	③（7.4）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR7/6）	底部煤付着
133	〃	〃	〃	③（7.9）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内にぶい黄橙色（10YR6/3）外橙色（5YR6/6）	
134	〃	〃	〃	③（9.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A 粗 B 良好 C 内にぶい赤褐色（2.5YR5/3）外橙色（5YR6/6）	
135	〃	〃	〃	③（8.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	
136	〃	〃	〃	③（8.6）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい赤褐色（5YR5/3）	外面煤付着
137	〃	〃	〃	③（8.4）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	底部煤付着
138	〃	〃	〃	①27.4②34.8～35.4 ③8.4④29.3	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい橙色（5YR6/4）	
139	〃	〃	〃	①（40.0）④（41.6）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内にぶい橙色（7.5YR6/4）外にぶい褐色（7.5YR5/4）	外面煤付着、黒斑あり

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量①口径③底径 cm ②器高④最大径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備　考
140	〃	〃	〃	①33.1	内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内橙色（5YR7/6）外橙色（5YR6/6）	
141	〃	広口壷	〃		外面ミガキ・ヨコナデ、内面ヨコナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	
142	〃	高杯	〃		内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR6/4）	
143	〃	〃	〃		内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（2.5YR6/8）	内面丹付着？
144	〃	甕形壷	〃	④（24.8）	内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 明赤褐色（2.5YR5/6）	
145	〃	不明	〃		外面ヨコ方向ミガキ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 灰黄褐色（10YR5/2）	内面下部に屈曲部あり
146	〃	壷	〃	③（4.4）	内外面調整不明	A やや粗 B 良好 C 明赤褐色（5YR5/6）	内外面丹塗り
147	〃	〃	〃	③（10.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
148	〃	〃	〃	③（7.2）	内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内橙色（5YR7/8）外橙色（7.5YR7/6）	底部穿孔？
149	〃	〃	〃	③（6.4）	内外面調整不明	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR7/6）	底部穿孔？
150	〃	〃	〃	③6.1	内外面ナデ、内面工具痕	A やや粗 B 良好 C にぶい褐色（7.5YR6/3）	
151	〃	器台	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 浅黄橙色（10YR8/4）	
152	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	
153	〃	〃	〃		外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR6/4）	
154	〃	〃	〃	①（11.0）	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B やや不良 C 橙色（5YR7/6）～浅黄橙色（10YR8/4）	
155	〃	〃	〃	①11.5	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	
156	〃	〃	〃	③（13.2）	外面タテハケ、内面ナデ	A 粗 B やや良好 C 内灰黄褐色（10YR5/2）～黄橙色（7.5YR7/8）外明赤褐色（5YR5/6）	
157	〃	〃	〃	③（12.6）	外面タテハケ、内面ナデ	A 精良 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR6/4）	
158	〃	〃	〃	①11.7②17.7～18.0 ③14.0	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR6/6）	
159	〃	〃	〃	①11.9②17.1 ③14.4	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（7.5YR7/6）	
160	〃	〃	〃	①11.8②18.4～18.6 ③14.2	外面タテハケ、内面ナデ	A やや粗 B 良好 C 橙色（5YR6/6）	
161	〃	支脚	〃		内外面ナデ、指頭痕残	A やや粗 B 良好 C にぶい橙色（7.5YR7/4）	
162	〃	〃	〃	③（8.0）	内外面ナデ、指頭痕残	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	
163	〃	〃	〃	③（9.7）	内外面ナデ、指頭痕残	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR6/3）	
164	〃	〃	〃	③7.7	内外面ナデ、指頭痕残	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/4）	
165	〃	〃	〃	①7.1	内外面ナデ、指頭痕残	A やや粗 B やや不良 C 浅黄橙色（10YR8/4）	
166	〃	鉢	〃	①（20.0）②10.9 ③6.7	内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C 内灰黄色（2.5Y6/2）外橙色（5YR7/8）	
167	〃	〃	〃	①（10.2）②5.6③5.4	内外面ナデ	A やや粗 B 良好 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	
168	〃	〃	〃	①（8.2）②9.6③5.2	内外面ナデ、口縁部指頭痕	A やや粗 B 良好 C 内橙色（7.5YR7/6）外にぶい黄橙色（10YR7/4）	
169	石製品	砥石	〃	長さ 13.8cm 幅 12.4cm 厚さ 6.9cm 重さ1.25kg	2面使用		
170	瓦器	椀	〃		内面調整不明、外面ヨコナデ	A 精良 B やや軟 C 灰白色（2.5Y8/1）	
171	〃	〃	〃		高台剥落	A 精良 B 堅緻 C 灰白色（7.5Y7/1）	
172	陶器	壷	〃		外面全面施釉、回転ヨコナデ	A 精良 B 堅緻 C 内灰黄褐色（10YR6/2）外灰オリーブ色（5Y5/2）	
173	須恵器	杯蓋	SX02		外部天井部ヘラ削り、他は回転ヨコナデ	A 良 B 堅緻 C にぶい褐色（7.5YR5/4）	焼けひずみあり
174	瓦器	椀	SP77		ヨコナデ	A 精良 B 良好 C 褐灰色（10YR4/1）	
175	〃	〃	〃		ヨコナデ	A 精良 B 良好 C 灰色（N －5）	

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量①口径③底径 cm ②器高④最大径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備　考
176	〃	小皿	SX21	①（6.6）②0.95③3.2	内外面ナデ	A 精良 B 堅緻 C 灰白色（2.5Y7/1）	底部回転糸切り
177	青磁	椀	カクラントレンチ		外面刷毛目、内面文様あり。内外面全面施釉。	A 精良 B 堅緻 C オリーブ黄（7.5Y6/3）	同安窯系
178	白磁	椀	SP85		高台は削り出し高台、露胎	A 精良 B 堅緻 C にぶい黄橙色（10YR7/3）	
179	弥生土器	不明	ブドウ畑トレンチ内		内外面調整不明	A やや粗 B 良好 C 赤褐色（10R4/4）	内外面丹塗り

出土遺物観察表（石器）

遺物番号	器　種	石　材	出土地点	法量（mm）①長さ②幅③厚さ	重　量（g）	備　考
180	スクレイパー	黒曜石	SC01貼床	①31②22③10	6.85	
181	石　核	〃	〃	①15②25③13	3.45	
182	〃	〃	SC01上層	①17②28③28	10.3	
183	三稜尖頭器	〃	SD01上層	①13②31③14	4.4	
184	打製石鏃	〃	SX20	①23②14③4	0.95	
185	楔形石器	〃	〃	①19②15③10	2.05	
186	二次加工剥片	安山岩	〃	①39②20③11	6.4	
187	石　錐	黒曜石	〃	①25②16③5	1.5	
188	楔形石器	〃	〃	①22②14③13	2.75	
189	使用痕剥片	〃	〃	①25②15③4	1.02	
190	石　核	〃	〃	①39②30③43	32.7	
191	偏平片刃石斧	蛇文岩	〃	①34②31③9	16.1	
192	打製石鏃	黒曜石	石棺付近	①21②18③4	1.1	
193	〃	安山岩	調査区南西表採	①21②21③7	1.7	
194	石　核	黒曜石	調査区西側表土剥ぎ時	①15②37③17	8.3	

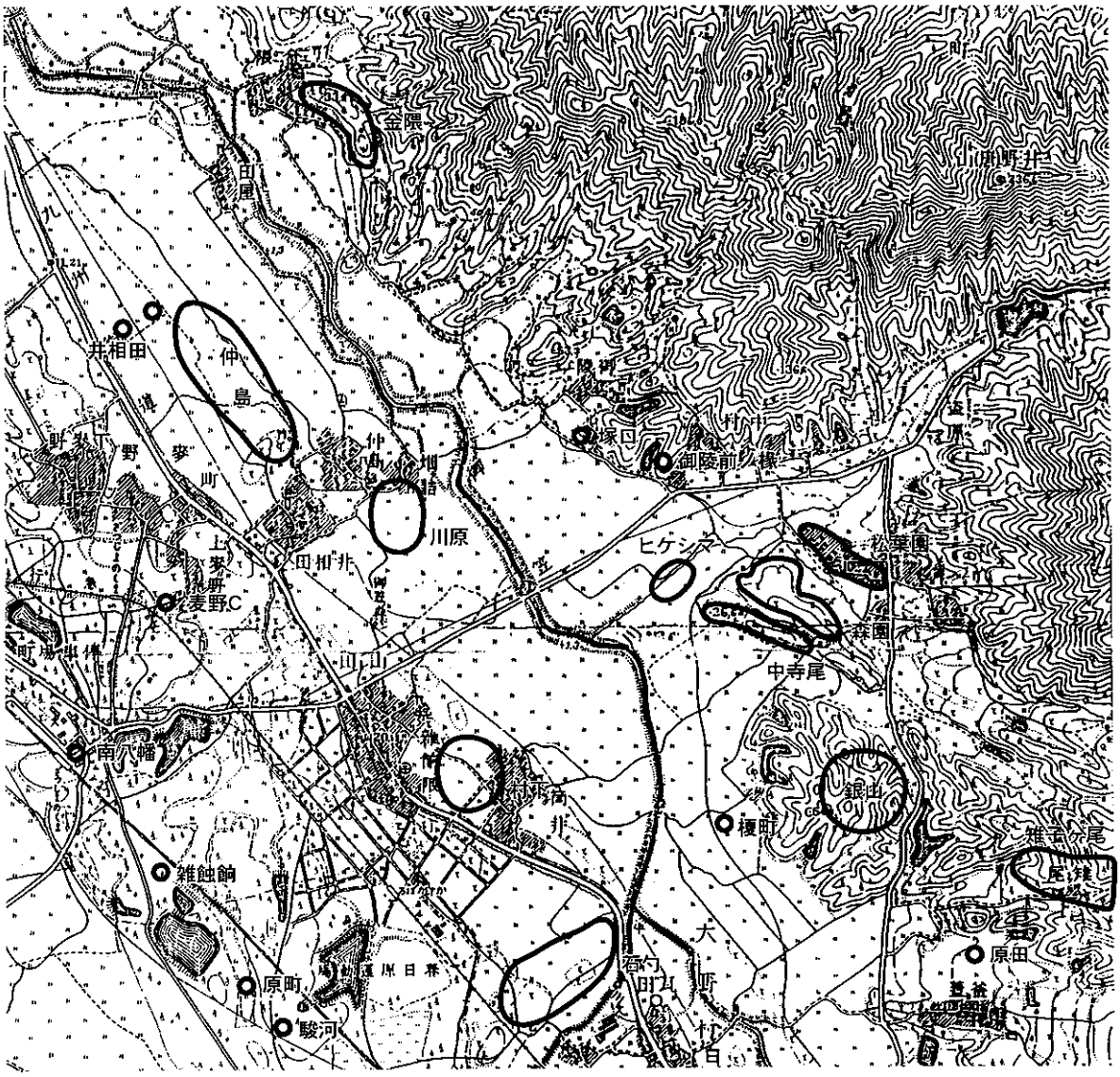
出土遺物観察表（鉄滓・焼土塊）

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量（cm）①長さ②幅③厚さ	備　考
195	鉄製品	鉄　滓	SP28	①2.5②2.6③1.2	
196	〃	〃	SX30	①3.4②2.6③1.6	
197	土製品	焼土塊	SD01－①上層	①5.1②4.0③3.1	
198	〃	〃	SD01－①下層	①6.3②4.8③2.0	
199	〃	〃	SX20	①2.4②1.9③1.3	
200	〃	〃	〃	①2.7②1.7③1.1	スサ一部に見られる
201	〃	〃	〃	①2.8②1.7③1.6	
202	〃	〃	〃	①2.0②2.0③1.5	
203	〃	〃	〃	①2.0②1.7③1.0	スサ一部に見られる。
204	〃	〃	〃	①3.0②2.2③1.8	
205	〃	〃	〃	①3.2②2.5③1.4	
206	〃	〃	〃	①2.8②2.6③1.7	スサ一部に見られる
207	〃	〃	〃	①3.4②2.9③2.2	1cm 前後の石の混入あり
208	〃	〃	SX30	①2.2②1.9③1.9	
209	〃	〃	SP33	①3.2②1.5③1.6	
210	〃	〃	SP80	①1.8②2.2③0.9	
211	〃	〃	〃	①2.55②2.0③1.8	
212	〃	〃	〃	①2.0②2.6③1.1	
213	〃	〃	〃	①3.5②2.4③2.0	
214	〃	〃	〃	①3.3②2.7③1.9	
215	〃	〃	〃	①4.0②3.5③2.1	
216	〃	〃	〃	①3.1②3.9③2.5	
217	〃	〃	SP81	①2.7②1.5③1.4	
218	〃	〃	〃	①2.7②1.9③0.8	
219	〃	〃	〃	①3.2②2.2③1.6	
220	〃	〃	〃	①3.1②2.6③1.1	断面に接合痕あり？
221	〃	〃	〃	①3.1②3.6③2.0	
222	〃	〃	〃	①3.8②3.2③2.8	
223	〃	〃	〃	①5.0②3.8③2.6	
224	〃	〃	〃	①5.0②4.7③2.9	スサ一部に見られる。ナデ痕あり。

Ⅳ. まとめ

遺構の時期

今回調査したのはわずか200㎡あまりであったが、種々の遺構・遺物が確認された。特に西半部においては弥生時代の遺構がまとまって認められた。まず祭祀土器をはじめとする土器群を出土したＳＸ20は弥生時代中期後半にあたると考えられる。調査の不手際により、遺構面と埋土の判別がつかなくなり結果的に掘りすぎた部分があるが、土坑掘り方は8.25×5.25ｍの不整形プランで深さは50cm前後であった。性格としては祭祀土坑と考えられるが、筒型器台が見られないのは注意する必要がある（註１）。ＳＣ01は調査区の南側にあり南半部は調査区外に、東半部をＳＤ01に切られ全体の1／4くらいしか残っていないが、径８ｍ前後の円形プランに復元される。遺物は上・下層に分かれ、中期中頃のものを含むが、遺構の時期は中期後半にあたると考える。ＳＤ01は調査区を縦断するようにのび、ＳＣ01を切る。溝内からの土器は大半が中期後半の遺物であるが、15・19・39・42・46～48などの後期の遺物が含まれている。いずれも小片のため詳細な時期については決定でき



第26図　松葉園遺跡周辺旧地形図（1/25,000）

ないが、後期にあたると思われる。

石棺墓は3基確認されたが、1号石棺墓を除くと墓坑掘り方のみの検出であり、内容を伺うのに充分ではない。1号石棺墓からは土器の出土はなく、詳細な時期は不明であるが、出土した鉄鏃の型式から古墳時代後期のものであろう（註2）。周溝状遺構としたＳＸ03・22はいずれも弥生土器を含み、時期は明らかではない。

遺構として明確ではないが、瓦器・輸入陶磁器の出土があり該期の遺跡の展開が周辺で予想される。

焼土塊について（第25図）

今回の調査区内からは、焼土塊が28点出土している。調査区内出土の焼土塊の大きさは2～7㎝、厚いものは3㎝弱で、胎土中に稲藁もしくは草本類の圧痕が残されているものもある。色調より内外面の区別のつくものがあり、これから見ると外面には指の跡、内面に稲藁などの圧痕が残る。焼土塊が出土した遺構はピット・溝と様々であるが、ＳＸ20やＳＤ01下層からも出土している。また焼土塊の他に、器表面がクレーター状やギザギザになり弾けた痕跡のある土器（破裂痕土器）が出土しており、弾けた土器は弥生時代中期後半のものを主としている。このことから調査区内では明確な焼土をともなう焼成遺構は確認されていないが、周辺に弥生時代中期後半の土器焼成遺構があると予想される。

弥生土器の焼成遺構については、福岡県小郡市西島遺跡（註3）や佐賀県鳥栖市大久保遺跡で焼けひずんだ土器や甕棺の焼成遺構が確認され、近年注意が喚起されている遺構である。今回調査区内で出土した焼土塊は宮田氏が粘土塊、石橋氏が焼粘土塊（註4）とされたもので、土器の焼成に伴って周囲を被覆した泥土が焼固したと考えられるものである。今回の調査では焼土坑などの焼成遺構本体は確認されておらず、破裂痕土器と焼土塊をもって焼成遺構の存在を想定したが、調査地内が削平を受けていることを考えるとすでに滅失した可能性もある。また焼成遺構の存在が確認された遺跡は大野城市内では確認されておらず、周辺でもあまり例がなく、遺跡の性格付けも含めて今後注意が必要である。（註5）

石器群について

当遺跡から出土した石器は、大きく後期旧石器時代、縄文時代、弥生時代の3時期に区分できるようである。まず、後期旧石器時代に位置付けられる資料としては、一点のみであるが三稜尖頭器（183）が挙げられる。遺跡の所在する乙金山南麓周辺では、釜蓋原遺跡で小型のナイフ形石器と細石刃、雉子ヶ尾遺跡で細石刃核が出土しているのみであり、三稜尖頭器は市内初例である。

次に縄文時代の資料としては、石鏃や石錐、楔形石器やスクレーパー、石核類が相当すると考えられる。特に剥片鏃的な特徴をもつ184などから判断して、縄文時代後期の石器を含んでいる可能性が極めて高いといえる。石核の技術的な特徴としては、小ぶりの素材を用いて、礫面や素材面をそのまま打面とし、打面調整をあまり行わないという点が挙げられる。こうした特徴を持つ石核は、縄文時代後晩期をはじめ、弥生時代にも認められることから、時期が確定できるとはいえない。

弥生時代の石器として明確なものは、扁平片刃石斧（191）のみである。しかし、黒曜石製の剥片石器の一部も当該期に属する可能性がある。

このように、松葉園遺跡では、旧石器時代から弥生時代にわたる石器が確認されている。特に旧石器時代から縄文時代にかけての資料は、市内では僅少であり、当該期の遺跡の分布や広がりを考えるうえで興味深い資料といえる。(林潤也)

松葉園遺跡の位置付け

大正期の地形図に当てはめると松葉園遺跡は乙金山から舌状に西へのびる低丘陵上に位置し、乙金村の集落域に重複している。遺跡の南西の微高地上には森園遺跡・中・寺尾遺跡が所在する。森園遺跡では中期中頃から末、中・寺尾遺跡は中期前半から後半の集落が確認され、中期後半にはこの3遺跡いずれも集落が営まれている。これまで森園遺跡・中・寺尾遺跡・ヒケシマ遺跡はそれぞれ別個の集落として捉えられた(註6)が、松葉園遺跡を含めこれらは半径500m内に位置している。住居の所在する丘陵は確かに異なっているが、距離的に近いこと、集落の動向に大きな時期差が認められないことから、大きく見れば同じ集落と捉えることもできよう。後期に入ると中・寺尾遺跡で1軒住居が見られる他は極端に少なくなる。今回検出されたSD01から調査区周辺で後期の遺跡の展開が予想されるが、その内容は周辺地の調査を踏まえた上で明らかにしたい。

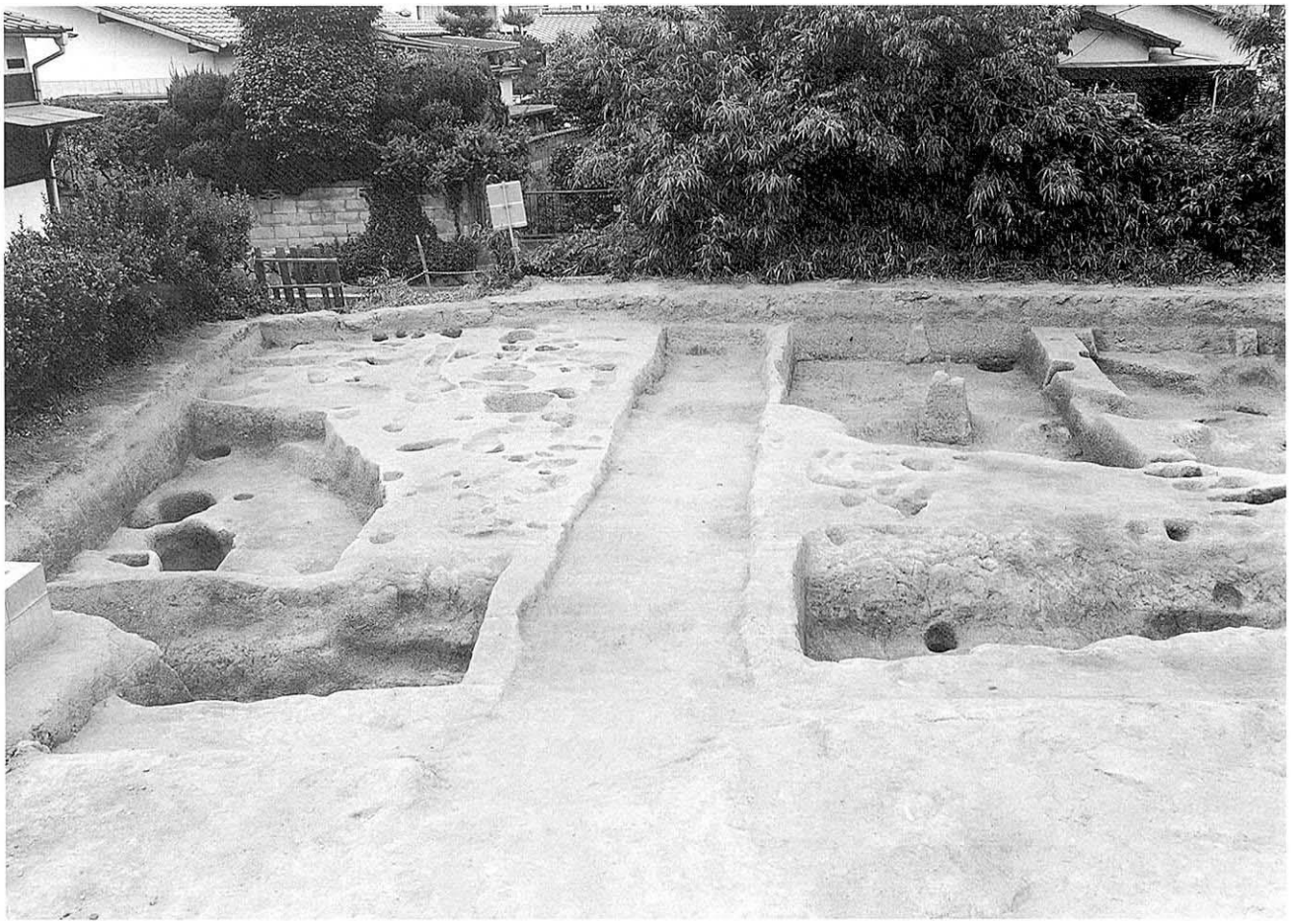
註1　向直也「Ⅳ　まとめ」『森園遺跡Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第55集(1999)
2　古野徳久「古墳時代鉄鏃の編年」『九州考古学』第64号(1989)
3　宮田浩之『三国地区遺跡群4・6』小郡市文化財調査報告書第109集(1996)
4　石橋新次「土器焼成に関する二・三の予察」『みずほ』第24号(1998)
5　春日市教育委員会平田定幸氏の教示によると、今のところ春日市内で焼成遺構は確認されていない。また那珂・比恵遺跡群においても管見の限りにおいて確認できない。
6　舟山良一『中・寺尾遺跡Ⅲ』大野城市文化財調査報告書第54集(1999)

図　　版

（1）調査前全景（西から）

（2）調査区東半部全景（北西から）

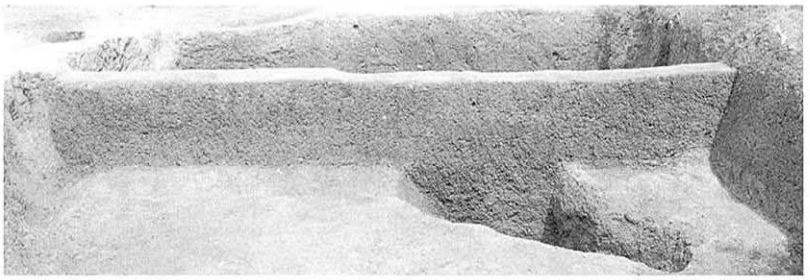
図版 2



（1）調査区西半部全景①（南東から）

（2）調査区西半部全景②（南東から）

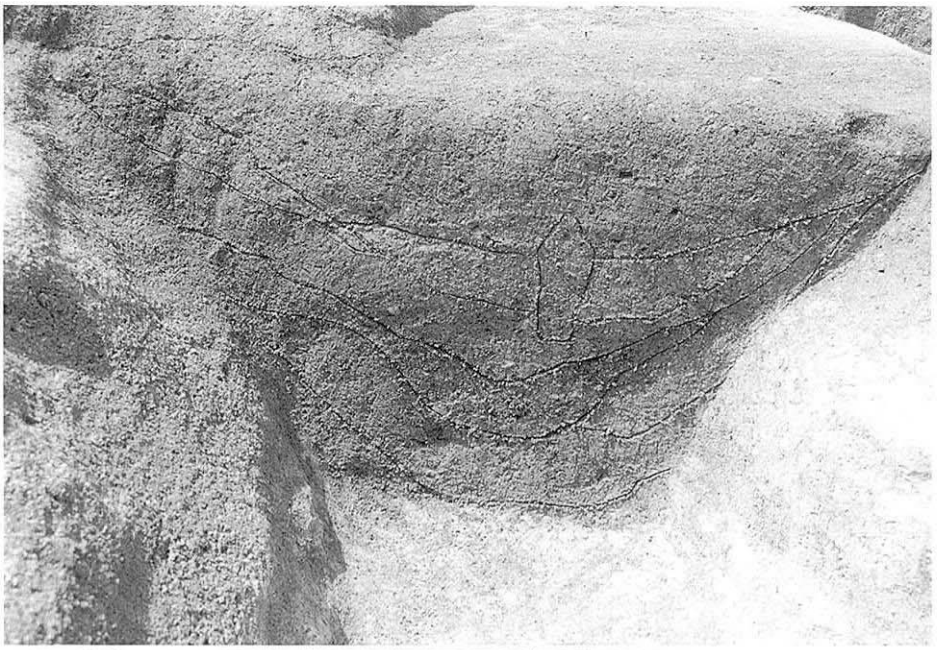
（1） ＳＣ01全景（南東から）



（2） ＳＣ01土層（北西から）

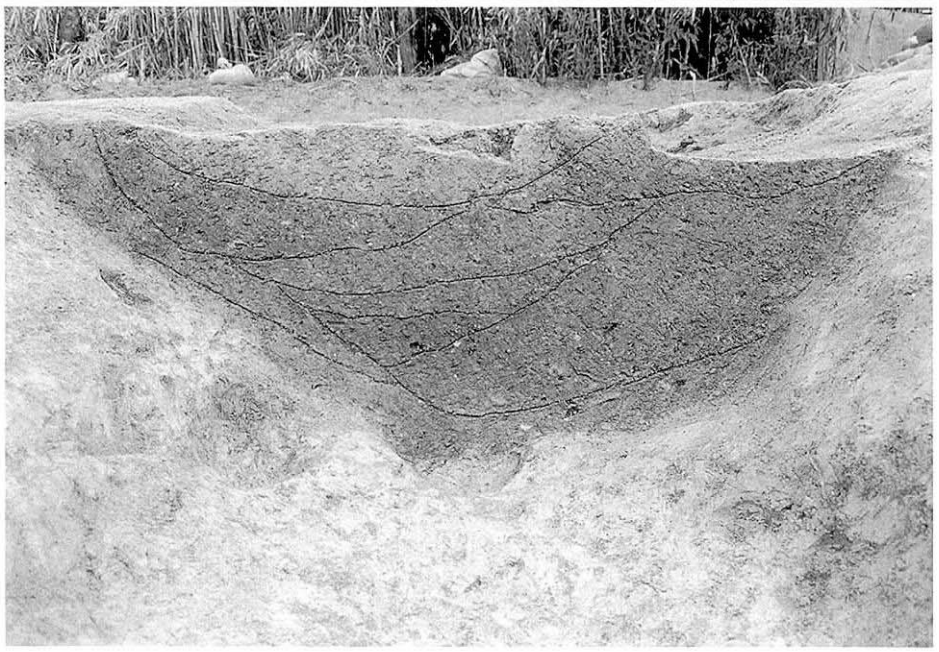
（3） ＳＤ01全景（南西から）

図版 4



（1）ＳＤ01ａ－ａ′面土層
（北東から）

（2）ＳＤ01ｂ－ｂ′面土層
（南西から）



（3）ＳＤ01ｃ－ｃ′面土層
（南西から）

（1） 1号石棺墓堀方検出状況（北から）

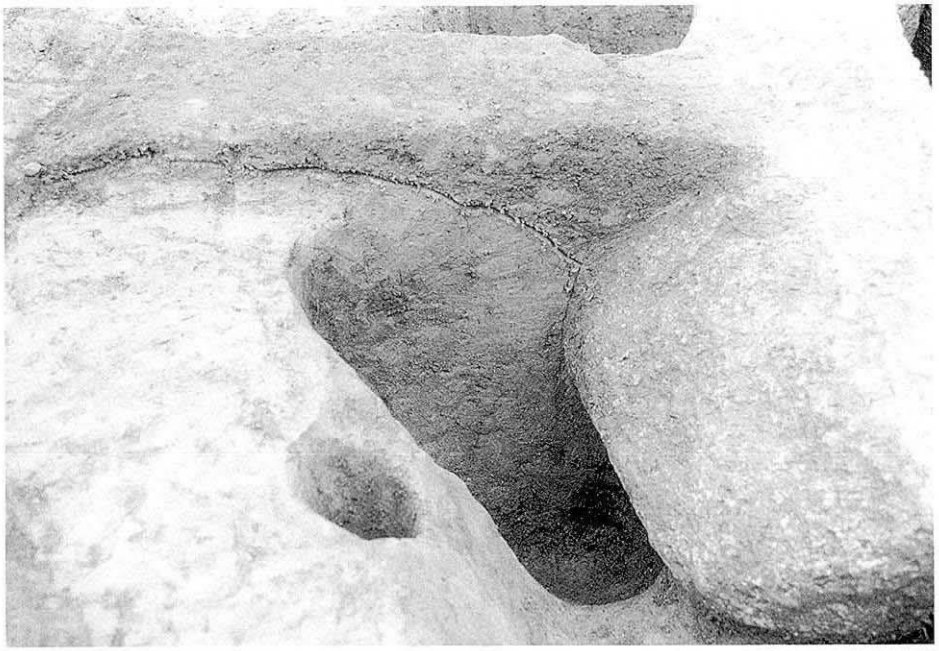
（2） 1号石棺墓全景（北から）

図版 6

（1） 1号石棺墓南側壁
裏込め（西から）

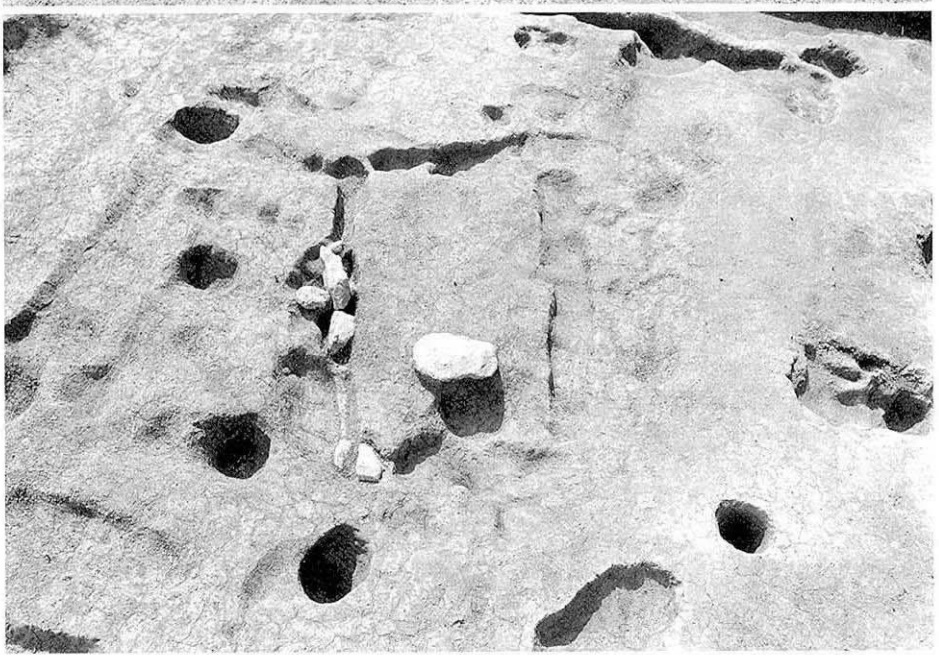
（2） 1号石棺墓北側壁
裏込め（西から）

（3） 1号石棺墓東小口壁
裏込め（南から）



（1） 1号石棺墓西小口
壁裏込め（南から）

（2） 2号石棺墓全景
（西から）



（3） 3号石棺墓全景
（東から）

図版 8

（1） ＳＸ22周溝状遺構
土層（南東から）

（2） ＳＸ20土層
（南から）

（3） ＳＸ20内井戸状遺
構（南東から）

（1） ＳＸ20遺物出土状況①（南東から）

（2） ＳＸ20遺物出土状況②（南から）

（1）ＳＸ20出土遺物

（2）調査区内出土焼土塊

50

51

52

（1） 1号石棺墓出土鉄器

180

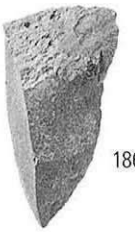
181

182

183

184

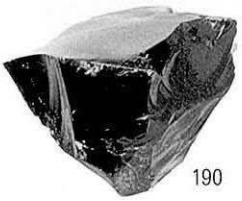
185


186

187

188

189


190

191

192

193

194

（2）調査区内出土石器類

図版12

40

66

67

74

82

83

84

111

112

140

135

144

138

158

159

160

168

169

165

176

166

195

196

167

報告書抄録

ふりがな	まつばぞのいせき
書名	松葉園遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第59集
編著者名	石木　秀啓
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	㊦816－8510　福岡県大野城市曙町２丁目２番１号
発行年月日	2003年７月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
松葉園遺跡（まつばぞのいせき）	福岡県（ふくおかけん） 大野城市（おおのじょうし） 乙金（おとがな）			33°32′45″	130°29′40″	1997.4.14 ～ 1997.6.13	277㎡	

所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松葉園遺跡	墓地	弥生・中世	弥生住居跡１軒 〃 溝　１条 〃 土坑　１基 古墳石棺墓３基	弥生土器 須恵器 瓦器 鉄滓 焼土塊	

大野城市文化財調査報告書

第59集

平成15年7月31日

発行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2－2－1

印刷　㈱川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6－6－41